

山科本願寺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇二一―六

山科本願寺跡

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

山科本願寺跡

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、工場建設工事に伴う山科本願寺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

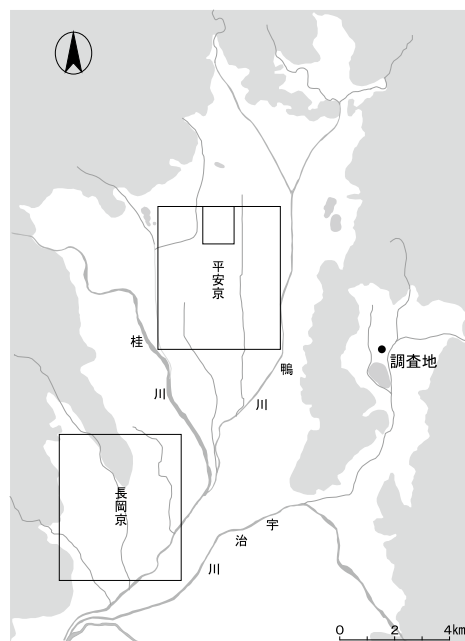
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和4年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 山科本願寺跡（京都市番号 20 S 644） |
| 2 調査所在地 | 京都市山科区西野山階町11番地の2 |
| 3 委 託 者 | 株式会社 藤岡製作所 代表取締役社長 五百井寿昭 |
| 4 調査期間 | 2021年5月10日～2021年7月20日 |
| 5 調査面積 | 628.1㎡ |
| 6 調査担当者 | 鈴木康高・中谷俊哉・渡邊都季哉 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山科」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 鈴木康高
付章1：南 雅代（名古屋大学宇宙地球環境研究所）
付章2：関 晃史（当研究所）、山田卓司（龍谷大学文学部歴史学科） |
| 14 分 析 | 金属製品の蛍光X線分析については山田卓司氏（龍谷大学）、人骨の形質学的鑑定については佐々木智彦氏（京都大学）、人骨・炭化物の年代測定については南 雅代氏（名古屋大学）にご協力いただいた。 |
| 15 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |
| 16 協 力 者 | 調査・整理作業にあたっては、
下記の方々からご教示頂いた。
記して謝意を表します。
木立雅朗、久保智康、佐々木智彦、鈴木久男、南 雅代
（五十音順、敬称略） |



（調査地点図）

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 歴史的環境と立地	2
(2) 既往の調査	2
3. 遺 構	8
(1) 基本層序	8
(2) 平安時代の遺構	8
(3) 平安時代から室町時代の遺構	9
(4) 室町時代後期の遺構	12
(5) 江戸時代の遺構	16
4. 遺 物	18
(1) 遺物の概要	18
(2) 土器類	18
(3) 瓦類	21
(4) 金属製品	22
(5) 石製品	23
5. ま と め	24
付章1 焼骨・炭化物の年代測定	29
付章2 八稜鏡の自然科学分析	30

図 版 目 次

図版1 遺構	遺構平面図 (1 : 150)
図版2 遺構	調査区北壁・東壁断面図 (1 : 80)
図版3 遺構	調査区北壁・東壁断面図 (層名)
図版4 遺構	墓39・65・176・177・178・194・199実測図 (1 : 40、墓65のみ1 : 20)
図版5 遺構	堀10断面図 (1 : 50)
図版6 遺構	建物1実測図 (1 : 50)

- 図版7 遺構 地下室126実測図(1:50)
- 図版8 遺構 柱穴列3~6実測図(1:60)
- 図版9 遺構 1 2区全景 堀10掘削前(北から)
2 2区全景 堀10掘削後(西から)
- 図版10 遺構 1 1区全景(南西から)
2 1区全景(西から)
- 図版11 遺構 1 堀70(西から)
2 堀70東壁(西から)
3 堀70西壁(東から)
- 図版12 遺構 1 墓65(北東から)
2 墓177・178(東から)
3 墓199(東から)
- 図版13 遺構 1 炉状遺構57(東から)
2 炉状遺構57(西から)
- 図版14 遺構 1 建物1(北から)
2 地下室126床面検出時(北から)
3 地下室126礎石検出状況(北から)
4 地下室126床面除去後(北から)
- 図版15 遺構 1 柱穴列1(東から)
2 柱穴列1 柱穴76・77(東から)
3 柱穴列2(東から)
4 柱穴列5・6(北から)
- 図版16 遺構 1 堀10(南西から)
2 堀10(西から)
3 土取り穴群(西から)
- 図版17 遺構 1 土坑172(東から)
2 池状遺構260遺物出土状況(南西から)
3 池状遺構260(北西から)
- 図版18 遺物 土器・瓦類・金属製品

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（南西から）	2
図4	作業状況（南西から）	2
図5	山科本願寺跡主要周辺調査位置図（1：4,000）	4
図6	堀70断面図（1：50）	9
図7	炉状遺構57実測図（1：30）	11
図8	柱穴列1・2実測図（1：60）	13
図9	土坑46・122・172・228・250・300実測図（1：50）	15
図10	池状遺構260実測図（1：50）	17
図11	平安時代の土器実測図（1：4）	18
図12	墓65出土土器実測図（1：4）	19
図13	室町時代の土器実測図（1：4）	20
図14	瓦類拓影及び実測図（1：4）	22
図15	金属製品拓影及び実測図（1：2）	22
図16	石製品実測図（1：4）	23
図17	主要遺構変遷図1（1：350）	26
図18	主要遺構変遷図2（1：350）	27
図19	周辺調査遺構配置図（1：2,000）	28

表 目 次

表1	主要周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	8
表3	火葬人骨同定部位一覧表	10
表4	遺物概要表	18

山科本願寺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯 (図1)

本調査は、工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地点は、山科本願寺跡にあたる。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）による試掘調査が行われ、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されたため、文化財保護課から原因者に対し発掘調査が必要であるとの指導がなされた。調査は原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

(2) 調査の経過 (図2～4)

調査は令和3年(2021)5月10日に開始した。調査区は、排土置き場を確保するため南北に分け、南側の2区から調査を開始し、続いて北側の1区の調査を行った。また、調査区外に広がる遺構の規模・構造を確認するために拡張区を3箇所設定し、調査を行った。各調査区の調査面積は1



図1 調査地位置図 (1 : 2,500)

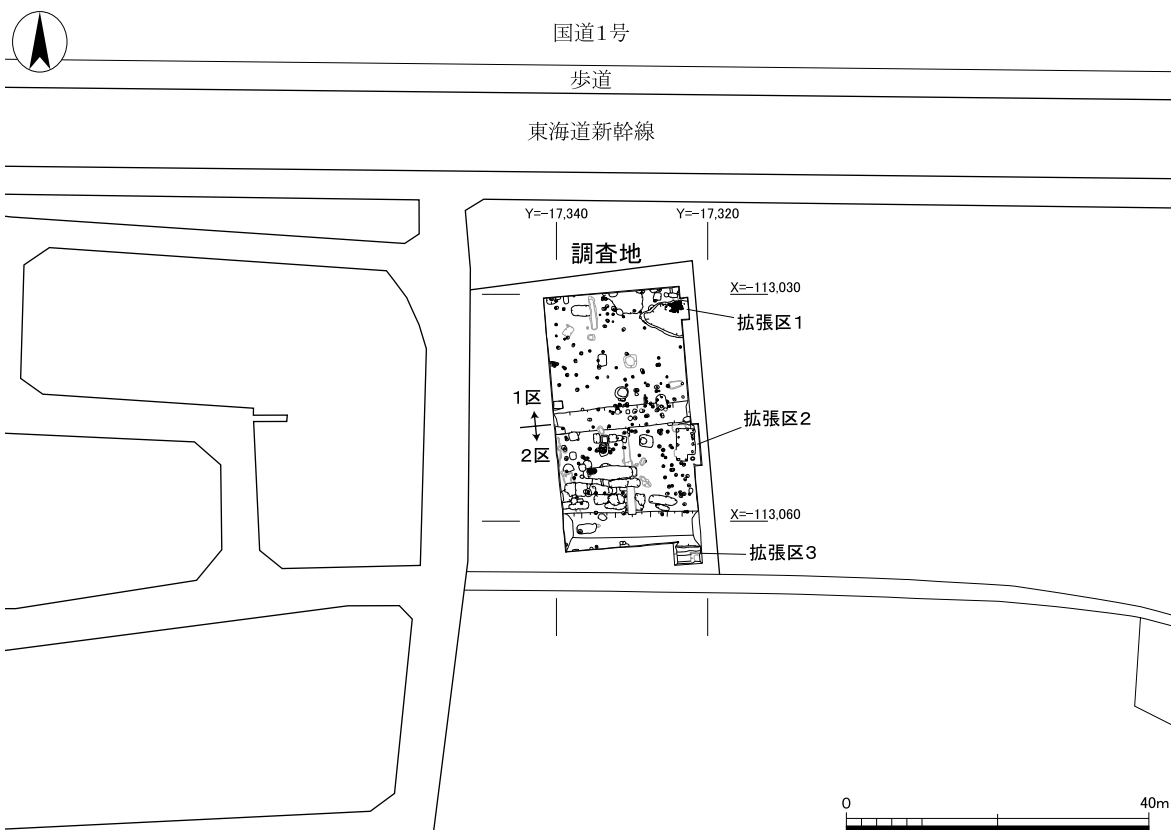


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 調査前全景 (南西から)



図4 作業状況 (南西から)

区284.4㎡、2区324㎡、拡張区1が3㎡、拡張区2が5.6㎡、拡張区3が11.1㎡である。調査面積は総計628.1㎡である。現代盛土から中世以降の耕作土までを重機により掘削し、地表下0.3～0.5mで地山を確認し、この上面で調査を行った。検出した主な遺構には、平安時代の柱穴・土坑、室町時代の建物・地下室・柱穴列・土坑・土取り穴群・墓・炉状遺構、江戸時代の池状遺構がある。検出した遺構は人力で掘削し、図面作成・写真撮影などの記録作業を行った。また、遺構の実測は写真測量を用いたところもある。調査後は埋め戻しを行い、2021年7月20日にすべての作業を終了した。

調査中は、適宜、文化財保護課による臨検を受けた。また、検証委員である京都大学の伊藤淳史助教と同志社大学の浜中邦弘准教授による検証を受けた。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

山科本願寺は、山科盆地の中央部やや西寄りに位置する。音羽川、四ノ宮川、安祥寺川、これらが合流した山科川などによって形成された扇状地の先端に位置する。このあたりは、周囲より標高が高く、比較的安定した地盤を形成している。遺跡北方には京と東国を結ぶ旧東海道が東西にはしり、近くには東海道から分岐する奈良街道や渋谷街道が通る交通と物資の要所であった。また、遺跡を限る山科川は醍醐、六地蔵を経て巨椋池に流れ込み、桂川・宇治川・木津川と合流し淀川となって大阪湾まで結ばれており、水運の面から見ても利便性の高い立地であったと考えられる。山科本願寺は第8代蓮如によって文明10年(1478)から造営が開始された浄土真宗の寺院である。その規模は南北約1km、東西約0.8kmと推定されている。複数の堀と土塁によって区画され、中央部に主要堂宇のある「御本寺」、その外側に有力末寺の坊舎が置かれた「内寺内」、土塁の外側に門徒の居住地などがある「外寺内」の3つのエリアで構成されると想定されている。また、延徳元年(1498)には、山科本願寺から約1km東に山科本願寺南殿と呼ばれる蓮如の隠居所が造営され、ここで明応8年(1499)に蓮如は没している。天文元年(1532)に管領細川晴元率いる法華宗徒や近江守護職六角定頼などの連合軍の焼き討ちにより、焼亡した。その後は、本拠地を大坂の石山本願寺などに移していく。山科の寺領は豊臣秀吉によって回復されるが、寺院として利用されることはなかった。

(2) 既往の調査(図5、表1)

山科本願寺では、これまで25次にわたる発掘調査が行われ、本調査は26次にあたる。これ以外にも、多数の試掘調査・立会調査が行われ、山科本願寺に関わる遺構・遺物が確認されている。

今回の調査地周辺では、調査10・11・13～18・24・33が行われている。

調査10・11では、東西方向の石組溝とこれに直交する暗渠が検出されている。溝内からは多量の瓦類が出土しており、付近に堀があったことが想定される。調査13では、東西・南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、甕蔵、井戸、石敷、土坑、柱穴が検出されている。調査14では、土塁のコーナー部、暗渠、土塁構築に伴う整地層、建物、井戸、炉跡、埋甕抜き取り跡、溝、土坑、柱穴が検出されている。調査15では、南北方向の土塁、堀、暗渠が検出されている。調査16では、土塁、土坑が検出されている。調査17では、室町時代の南北方向の土塁、堀、暗渠、建物、甕据付け穴、溝、土坑、柱穴、江戸時代の土坑が検出されている。調査18では、東西方向、南北方向、北西から南東方向の3条の堀、建物、井戸、堀、柵、土坑が検出されている。調査24では、堀状の落込み、井戸、溝、土坑、柱穴が検出されているが、その詳細は明らかではない。調査33では、室町時代後期の東西方向の堀、堀の埋没後にその上面で建物、柵、埋甕群、溝、柱穴、土坑、江戸時代の土坑が検出されている。室町時代の木の板と杭で壁面を形成する土坑は槽状の遺構とされている。

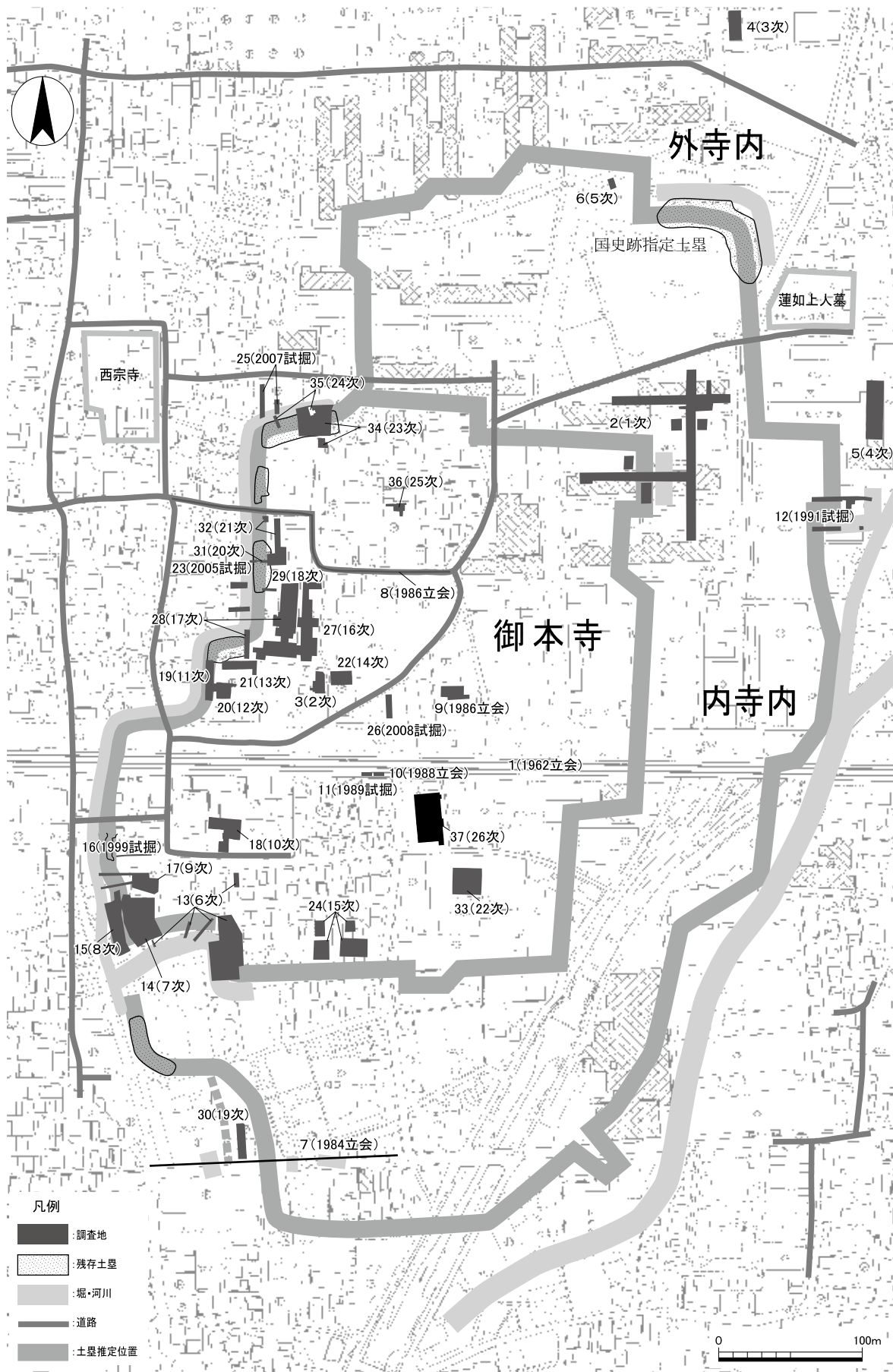


图5 山科本願寺跡主要周辺調査位置図 (1 : 4,000)

表1 主要周辺調査一覧表

No.	次数・調査名(調査記号)	所在地：山科区	調査期間	方法	概要	文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962. 8. 9～11. 11	立会	南北方向の石組溝、暗渠、南北方向の土塁	1
2	1次調査	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973. 5. 21～8. 4	発掘	建物・鍛冶場、石垣、柵、南北方向の堀・土塁	2
3	2次調査	西野山階町	1974. 10. 9～11. 3	発掘	石組溝、石室、庭園の一部	2
4	3次調査(76RT-YG001)	西野今屋敷町9(安祥寺中学校)	1976. 11. 17～11. 30	発掘	旧耕作土層	3
5	4次調査(76RT-YG002)	西野大手洗町20(山階小学校)	1977. 2. 14～3. 5	発掘	江戸時代以降の落込み	4
6	5次調査(76RT-JN001)	西野阿芸沢町(山科中央公園)	1978. 10. 30～11. 13	発掘	攪乱のみ	5
7	下水立会(83RT-SW061)	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984. 3. 6～11. 17	立会	東西および南北方向の堀、土坑群	6
8	下水立会(85RT-SW054)	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986. 4. 1～ 1987. 5. 16	立会	南北方向の堀と土塁、土坑	7
9	(86BB-RT0109)	西野山階町12	1987. 1. 27～1. 30	立会	東西方向の石組溝	8
10	(88BB-RT005)	西野山階町29	1988. 5. 30～6. 2	立会	東西方向の石組溝	9
11	(89BB-RT021)	西野山階町29	1989. 10. 2～10. 14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	(91RT-AH001)	西野大手洗町20(山階小学校)	1991. 8. 2～10. 18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	6次調査(96RT-HG001)	西野左義長町16ほか	1997. 4. 20～7. 10	発掘	東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、建物、井戸	12
14	7次調査(97RT-HG002)	西野左義長町23	1997. 7. 16～9. 18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場	13
15	8次調査(98RT-HG003)	西野左義長町23-1、23-4	1998. 8. 17～11. 9	発掘	南北方向の堀と土塁、暗渠	14
16	(センターNo. 60)	西野左義長町19-1ほか	1999. 10. 28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	9次調査(00RT-HG004)	西野左義長町19-1ほか	2000. 5. 10～6. 30	発掘	建物、溝、暗渠、土塁基底部	16
18	10次調査(04RT-HG006)	西野左義長町13-2	2005. 1. 17～3. 18	発掘	東西および南北方向の堀、堀、柵	17
19	11次調査(04RT-HG007)	西野山階町30	2005. 3. 1～3. 15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	18
20	12次調査(05RT-HG008)	西野山階町30	2005. 5. 11～5. 25	発掘	土塁内側斜面と暗渠	19
21	13次調査(05RT-HG009)	西野山階町30	2005. 5. 30～7. 2	発掘	土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠	20
22	14次調査(05RT-HG010)	西野山階町28-5、28-6	2005. 11. 11～12. 16	発掘	焼成土坑、庭園遺構、柱列、多量の輸入陶磁器、ガラス玉出土	21
23	(保護課No.05S208)	西野広見町31-1ほか	2005. 9. 20	試掘	御本寺西側を限る堀の西肩口	22
24	15次調査	西野左義長町25-4ほか	2006. 7. 31～9. 15	発掘	御本寺南側を限る堀状の落込、土坑、井戸、溝、柱穴	23
25	(保護課No.07S274、275)	西野広見町5-7、5-10	2007. 9. 25	試掘	御本寺北側を限る堀の北肩部	24
26	(保護課No.08S103)	西野山階町11-5ほか	2008. 9. 1	試掘	GL-0. 4mで整地層を確認	25
27	16次調査(10RT-HG012)	西野山階町30-1ほか	2011. 1. 11～3. 11	発掘	整地面、焼土の堆積、通路状遺構	26
28	17次調査(11RT-HG013)	西野山階町30-1ほか	2011. 7. 21～9. 30	発掘	整地面、石組溝、土塁など	26
29	18次調査(12RT-HG014)	西野山階町30-1ほか	2012. 7. 17～10. 4	発掘	石組井戸、風呂関連遺構群、塀状遺構、土塁など	27
30	19次調査(13RT-HG016)	東野舞台町20、20-4	2013. 10. 28～11. 25	発掘	中世の盛土または整地土、平安時代中期の建物、溝、土坑など	28
31	20次調査(13RT-HG017)	西野山階町35ほか	2014. 1. 20～2. 7	発掘	整地土、土塁裾部	29
32	21次調査(14A001)	西野山階町35ほか	2014. 7. 22～9. 30	発掘	整地面、土塁、堀、溝、柱穴など	30
33	22次調査(14S612)	西野離宮町40	2015. 7. 30～9. 18	発掘	建物、埋甕、土坑などの酒造遺構、堀	31
34	23次調査(18A007)	西野山階町37-2、37-3	2018. 12. 3～12. 27	発掘	整地土、柵、土坑など、土塁地形測量及び断面観察	32
35	24次調査(19A008)	西野山階町36-2、38-1、51	2019. 12. 9～12. 19	発掘	土塁の形状と基底部の構築状況を調査	33
36	25次調査(20A001)	西野山階町44	2020. 6. 1～6. 30	発掘	土坑、井戸、整地土など	33
37	26次調査(21RT-HG018)	西野山階町11-2	2021. 5. 20～7. 20	発掘	建物、地下室、柱穴列、土取り穴群、堀、墓、炉状遺構	本報告

※ 調査番号は図5に対応

以上のように御本寺南半部では、残存していた土塁と堀に加え、絵図などには見られない堀が調査18・33で見ついている。いずれも山科本願寺焼亡時より前には埋められ、その上面から建物などが成立することから、山科本願寺造営ないしは整備の過程で掘削されたことが明らかになっている。また、検出された遺構には小規模な掘立柱建物、井戸、地下室、甕蔵、埋甕、鍛冶遺構などといった手工業生産や貯蔵に関わる遺構が検出されている。

文献一覧（表1の文献番号と一致）

- 1 杉山信三・堤圭三郎「27. 山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 日本国有鉄道 1965年
- 2 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 3 「山科本願寺跡1」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 4 「山科本願寺跡2」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 5 「山科本願寺跡」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 6 平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 7 百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年』京都市文化観光局 1988年
- 8 百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 9 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 10 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 11 本弥八郎「山科本願寺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12 永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 13 近藤知子「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 14 吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 2000年
- 15 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 16 吉崎 伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 17 小檜山一良「山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 18 清藤玲子「山科本願寺跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年

- 19 柏田有香『山科本願寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 20 柏田有香「山科本願寺跡(3)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 21 柏田有香「山科本願寺跡(4)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 22 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 23 未報告(古代文化調査会による調査)
- 24 家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 25 堀 大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
- 26 柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 27 柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 28 近藤奈央「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
- 29 近藤章子「山科本願寺跡(1)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 30 新田和央・馬瀬智光「山科本願寺跡(2)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 31 佐藤好司『山科本願寺跡・左義長町遺跡-建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』イビソク京都市内遺跡調査報告第14輯 株式会社イビソク 2017年
- 32 奥井智子「山科本願寺跡 第23次」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年
- 33 奥井智子「山科本願寺跡 第24・25次」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局 2021年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図版2・3)

調査地の現地表面の標高は40.4～40.8mで、東側から西側に向かって緩やかに傾斜する。

基本層序は、1区北壁東部の $Y = -17,328$ を基準にすると、地表から現代盛土が厚さ0.2m (北壁断面図1層)、近世以降の耕作土が厚さ0.35m (北壁断面図3・4・6層)、にぶい黄褐色極細粒砂の地山 (北壁断面図23層) となる。2区東壁南部の $X = -113,056$ を基準にすると、地表から現代盛土が厚さ0.2m (東壁断面図1・2層)、近世以降の耕作土が0.1m (東壁断面図3層)、地山 (東壁断面図63・65層) となる。地山は上層のにぶい黄褐色細粒砂と下層の黒褐色砂礫層に大別できる。

遺構は全て地山上面で検出した。同一面で、平安時代から室町時代の遺構を検出した。以下では1・2区を合わせて、一つの調査区として遺構の位置を記す。

(2) 平安時代の遺構 (図版1)

この時期の遺構は柱穴・土坑を少数検出したのみで、建物や柵などを復元することはできなかった。

柱穴163 調査区中央部西寄りで検出した。西側を墓39、北側を堀70によって失われている。そのため、残存する平面形は扇形で、その規模は南北0.4m、東西0.4m、深さ0.2mである。遺物は、4C段階の土器類がわずかに出土した。

柱穴292 調査区中央部で検出した。平面形は円形で、掘形の規模は直径0.3m、深さ0.2mである。遺物は、4C段階の土器類がわずかに出土した。

柱穴307 調査区中央部で検出した。平面形は円形で、掘形の規模は直径0.3m、深さ0.2mである。遺物は、4C段階の土器類がわずかに出土した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	柱穴163・292・307	
平安時代 ～室町時代前期	堀70、墓39・65・176～178・194・199、炉状遺構57	
室町時代後期	建物1、地下室126、柱穴列1～6、土坑9・20・46・122・172・228・250・300、土取り穴群、堀10	
江戸時代	池状遺構260	

(3) 平安時代から室町時代前期の遺構 (図版1)

この時期の遺構は堀・墓・炉状遺構を検出した。

堀70 (図6、図版11) 調査区中央部で検出した東西方向の堀である。東西両側ともに調査区外に広がる。埋土上面から墓65や柱穴・土坑が掘り込まれる。方位は西に対し5.7度南に振る。断面形は箱形を呈し、検出長18m、検出幅2.8~2.9m、深さ1.2~1.3mである。底部の標高は38.8~39.0mである。埋土は、北側から南側に向かって埋められる。土質は東側と西側でほぼ共通しており、礫を多く含む層とそうではない層に分けることができる。遺物は、平安時代の土器類が出土しているが、その量がわずかであるため遺構の時期を判断することが難しい。遺構の重複関係から埋土上面で成立する14世紀代の墓65が最も古くなるため、これより古いことは確実で、その上限は平安時代後期の柱穴163を掘り込んでいる。このことから、平安時代後期から室町時代前期に位置付けられる。

墓65 (図版4・12、表3) 調査区中央部西壁際で検出した。西側は調査区外に広がる。平面形は隅丸方形で、南北1.0m、東西1.15m、深さ0.2mである。掘形内部で常滑焼広口壺片と焼骨片が混在した状態で出土した。壺は骨蔵器として用いられたものと考えられる。この混在した状態が原位置を保っているのか後世に人の手が加えられた状態なのかを判断することは難しい。掘形に沿って、0.1~0.2m程度の石材を3石検出した。骨蔵器と考えられる常滑焼広口壺の年代は14世紀代に属する。

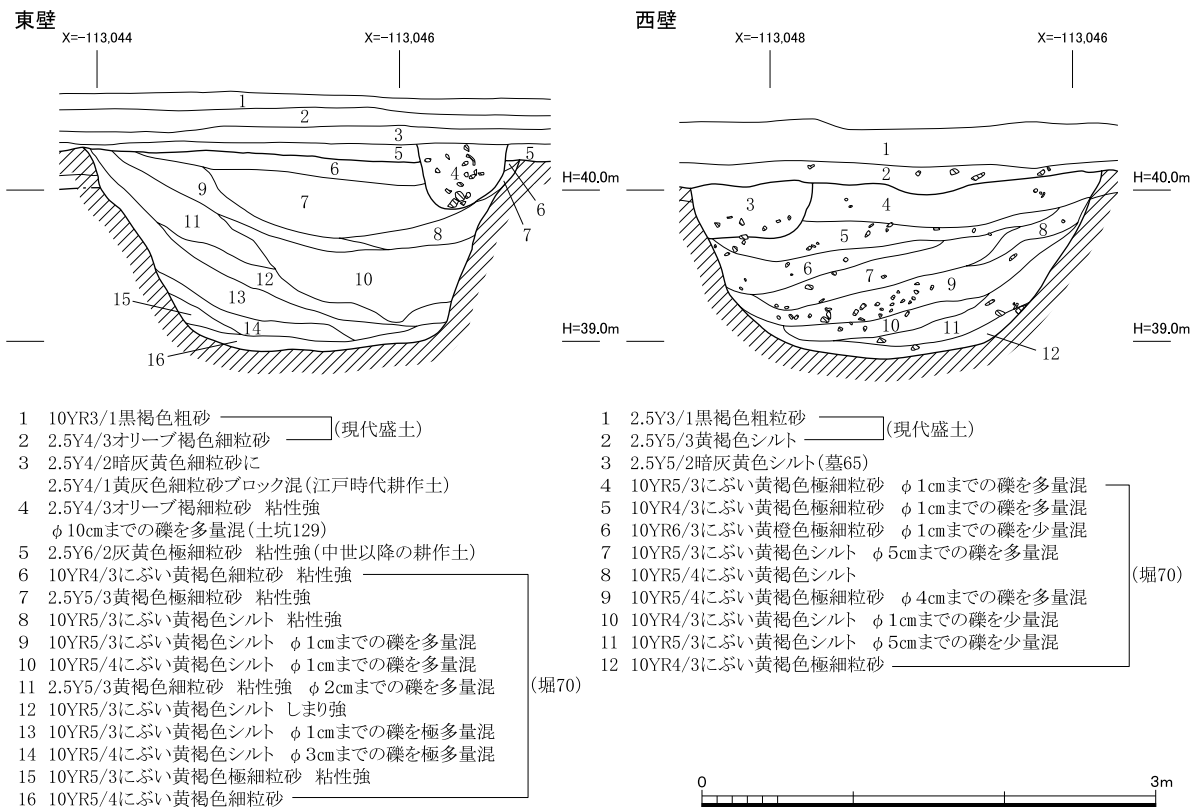


図6 堀70断面図(1:50)

出土した焼骨は人骨である。細片が多く部位を同定できるものは少ない。同定できたものは表3の通りである。左外耳孔が3点出土していることから、少なくとも3個体以上の骨が埋められていたことが明らかになった¹⁾。また、出土人骨の年代測定の結果、おおよそ14世紀代の測定結果が得られ(付章1参照)、人骨と骨蔵器の年代はほぼ一致する。また、後述する墓177や炉状遺構57でも、年代測定の結果、ほぼ同時期であることが明らかになった。

墓39(図版4) 調査区中央部西側で検出した。平面形は方形で、一辺1.2m、深さ0.3mである。土層から棺の痕跡や人骨の出土はなかったが、検出した位置や形状・規模から墓と判断した。

墓176(図版4) 調査区中央部で検出した。墓177を掘り込んで成立する。平面形は方形で、一

表3 火葬人骨同定部位一覧表

出土遺構	同定部位	備考	最小個体数
炉状遺構57	手中節骨遠位端	あるいは基節骨遠位端。	1
墓65	右アステリオン付近		3
	前頭骨眉間部		
	眼窩上?		
	左側頭骨(前方)		
	右卵円孔		
	右乳様突起		
	左上顎骨(前方)		
	右上顎骨(前方)		
	右頬骨前頭突起		
	下顎骨(前方)	正中中部が重複する。	
	下顎骨正中中部(内側)		
	左下顎骨枝(内側)		
	軸椎	重複する。	
	軸椎歯突起		
	左外耳孔	3点が重複する。	
	左外耳孔		
	左外耳孔		
	右外耳孔	重複する。	
	右外耳孔(後方)		
	左内耳孔	重複する。	
右内耳孔			
左肩甲骨か			
右肩甲骨鳥口突起			
右肩甲骨関節窩			
左橈骨遠位端			
左寛骨耳状面			
墓177	右下顎枝(内側)		1
	右下顎		
墓178	前頭骨右前方		1
	眉間部	鼻骨、上顎骨前頭突起を含む。	
	右内耳付近		
	右正円孔		
	左乳様突起付近		
右大翼片か			

辺1.0m、深さ0.5mである。土層の断面観察から、木製の棺の痕跡を確認することができた。この埋土内から、わずかに人骨の細片が出土しており、その周囲に骨が腐朽したと見られる痕跡があったことから、土葬墓と考えることができる。

墓177 (図版4・12、表3) 調査区中央部で検出した。西端は墓176によって掘り込まれる。平面形は隅丸方形で、南北0.7m、東西0.7m、深さ0.15mである。掘形の西部で直径15cmの円形にまとまった状態の焼骨を検出した。厚さ5cm程度である。検出状況から、有機質性の円筒形の骨蔵器に焼骨を納めていたものと考えられる。出土人骨の年代測定の結果、おおよそ14世紀代の測定結果が得られた(付章1参照)。

墓178 (図版4・12、表3) 調査区中央部で検出した。西側には墓177が近接する。平面形は隅丸方形で、南北0.8m、東西0.6m、深さ0.15mである。掘形の北西部で直径15cmの円形にまとまった状態の焼骨を検出した。厚さ5cm程度である。墓177と同様の構造の骨蔵器である。

墓194 (図版4) 調査区中央部で検出した。南側は炉状遺構57に掘り込まれる。掘形の平面形は南北方向に長い長方形で、南北1.2m、東西1.1m以上、深さ0.35mである。この内部に、南北0.85m、東西0.7mの木製の棺の痕跡を検出した。遺物の出土はない。

墓199 (図版4・12) 調査区中央部西壁際で検出した。西側は調査区外に広がる。掘形の平面形は東西方向に長い長方形で、南北1.1m、東西1.3m以上、深さ0.45mである。この内部に、南北1.0m、東西1.15mの木製の棺の痕跡を検出した。断面観察からも垂直に立ち上がる、木棺側板の痕跡を確認することができたが、木材は完全に腐朽してしまっていた。遺物の出土はない。

炉状遺構57 (図7、図版13、表3) 調査区中央部で検出した。墓194の南端を掘り込んで成立する。掘形の平面形は南北方向に長い隅丸方形で、その規模は南北1.9m、東西1.3mである。掘形の中央部では被熱面とその上面で東西方向に並ぶ石列を2列検出した。被熱面は2層確認することができる。報告の便宜上、古段階と新段階と呼称する。古段階の平面形は南北に長い隅丸方形で、その規模は南北1.3m、東西0.9mの範囲が被熱し赤褐色を呈する。新段階の平面形も南北に長い隅丸方形で、南北1.1m、東西0.8

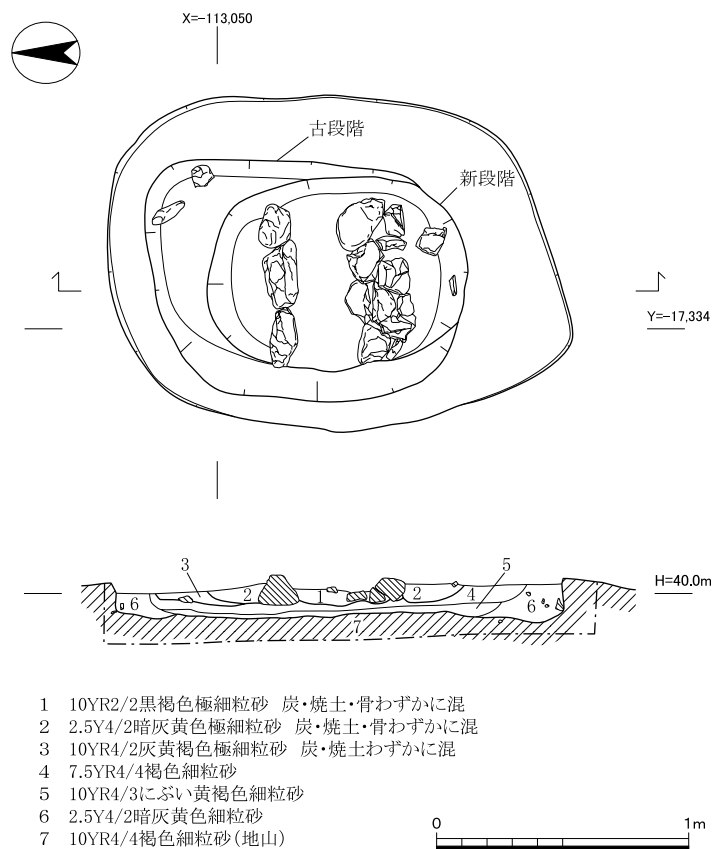


図7 炉状遺構57実測図(1:30)

mの範囲が被熱する。新段階と古段階は南辺を共有し、これ以外の東西北辺は0.1～0.25mほど規模が縮小する。また、床面は共通しており、段差などは見られない。このことから、2層の被熱面は作り替えに伴う、機能面の違いと判断できる。石列は、0.2～0.3m程度の石材を3～4石程度を東西方向に2列に並べる。列間は0.2m程度である。南側の石列の背後には、やや小ぶりの石材が見られ、裏込め状を呈する。石材は、底面以外が被熱し、一部は被熱によって割れたと思われるものもある。新旧の被熱面と石列内では埋土の様相が異なり、石列内は黒褐色極細粒砂で炭・焼土・焼骨、新段階被熱面埋土は暗灰黄色極細粒砂で炭・焼土・焼骨が混じるが、古段階の被熱面埋土は灰黄褐色極細粒砂で炭・焼土は混じるが、焼骨は混じらない。被熱面・石列と埋土の違いから、機能時を3段階に分けることができ、古い順に古段階被熱面→新段階被熱面→石列と想定できる。ただし、最終段階の石列は、底部以外の面が被熱していることから、石の背後が埋まっていない段階で機能していたものと考えることができ、新段階時にすでに据え付けられ機能していたものが規模縮小に伴って背面が埋められた、ないしは古段階から利用され続けていたと考えることもできるが、実態は不明である。遺物は、被熱面上から銭貨と鉄釘が出土した。焼骨は人骨である。出土人骨の年代測定の結果、おおよそ14世紀代の測定結果が得られた（付章1参照）。

その性格については、埋土に焼骨が混じり、かつ周囲に墓65・177・178といった焼骨を埋葬する墓が検出されていることを踏まえると焼き場遺構とも捉えうるが、現在のところ判断することが難しい。今後、類例の収集や増加を待って、検討していく必要がある。

（4）室町時代後期の遺構（図版1）

この時期の遺構は建物・地下室・柱穴列・土坑・堀などを検出した。

建物1（図版6・14） 調査区中央部東端で検出した掘立柱建物である。東側は調査区外に広がる。その規模は、南北8.3m、東西3.5m以上である。方位は北に対し約7度西に振る。柱間は南北が1.2～2.2m、東西が1.5～1.6mの不等間である。柱穴の平面形は円形で、その規模は0.4～0.5m、深さ0.15～0.6mである。柱穴109と182には、地下式礎石がある。柱穴の掘形および柱痕埋土に、炭・焼土が含まれるものはない。

地下室126（図版7・14） 調査区中央部東端で検出した。平面形は南北に長い長方形で、南西部の一部が南側に方形に張り出す。規模は、方形の張り出し部を含めると南北4.95m、東西2.5mとなる。東西の壁際で南北方向に並ぶ礎石を検出した。その間隔は約1m程度であるが、北東部では0.4m間隔と密に並ぶ。礎石は基本的には掘形底面に据えられるが、構築土上に据えられたものもあり、部分的な補修が加えられたものと見ることができ。石材の大きさは0.2～0.5m程度である。これらの礎石は床面構築土によって覆われる。床面構築土は大きく2層に分かれ、下層は暗灰黄色細粒（図版7-5層）、上層はにぶい黄褐色シルト（図版7-2層）で、この間には薄い炭層（図版7-4層）がある。この床面上面で、炭・焼土を多く含む柱跡を検出し、この下部に礎石が位置する。掘形が見られないことから、礎石を据え、柱を立ててから上層構築土で床面を構築したと判断できる。床面の一部には被熱痕がある。壁材は残っていなかったが、その痕跡を確認するこ

とができた（図版7-3層）ことから、木製と考えられる。西壁のこの層中から多量の鉄釘が出土しており、木製壁材の固定に関わるものと考えられるが、鉄釘の向きや規模が一定せず、その構造を把握するには至らなかった。炭・焼土を多量に含む土で埋められており、出土土器の年代も踏まえると山科本願寺焼亡期の遺構と考えられる。遺物は、10 A段階の土器類が出土した。

柱穴列1（図8、図版15） 調査区南部で検出した東西方向の柱穴列である。堀10の北側の肩部付近に位置し、堀10の埋没後に成立する。方位は北に対し1度西に振る。3間分を検出し、その検出長は12mである。柱間は3.1～5.6mの不等間である。柱穴の平面形は円形で、その規模は0.3～0.5m、深さ0.3～0.4mである。柱穴の柱痕の埋土には炭・焼土を多量に含むが、掘形埋土には含まない。柱穴25・76・77には、地下式礎石がある。

柱穴列2（図8、図版15） 調査区南西部で検出した東西方向の柱穴列である。土取り穴群の埋没後に成立する。方位は正方位。2間分を検出し、その検出長は3.6mである。柱間は1.2～2.4m

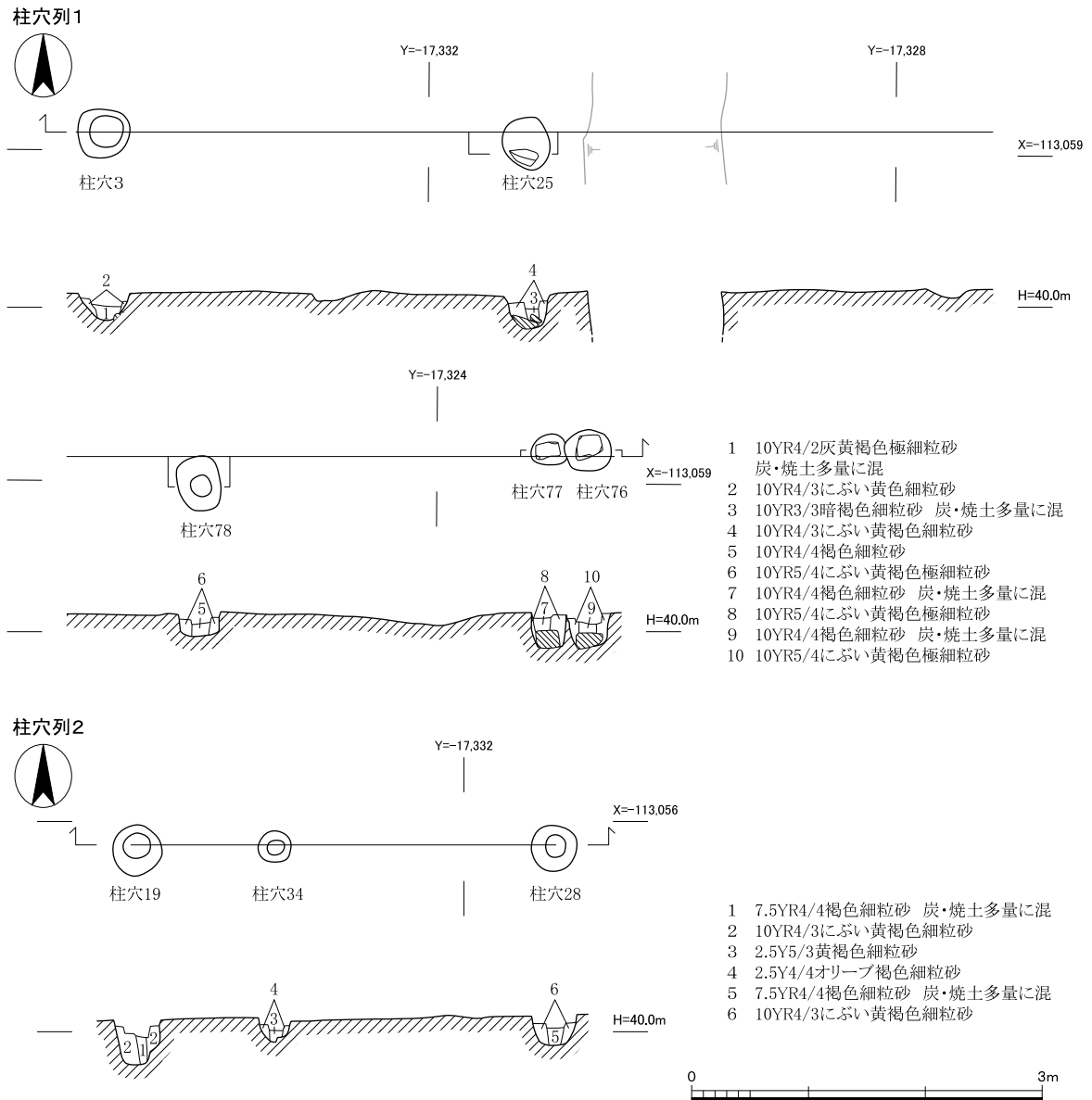


図8 柱穴列1・2実測図（1：60）

の不等間である。柱穴の平面形は円形で、その規模は0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mである。柱穴の柱当たりの埋土には炭・焼土を多量に含むが、掘形埋土には含まない。

柱穴列3（図版8） 調査区中央部西側で検出した南北方向の柱穴列である。方位は北に対し3度西に振る。2間分を検出し、その検出長は3.1mである。柱間は1.4～1.7mの不等間である。柱穴の平面形は円形ないしは楕円形で、その規模は0.3～0.6m、深さ0.2～0.3mである。柱穴の掘形および柱痕の埋土ともに炭・焼土を含まない。

柱穴列4（図版8） 調査区中央部で検出した東西方向の柱穴列である。堀70の南側の肩部付近に位置し、この埋没後に成立する。方位は北に対し3度西に振る。3間分を検出し、その検出長は7.1mである。柱間は1.9～3.1mの不等間である。柱穴の平面形は円形で、その規模は0.3～0.4m、深さ0.1～0.25mである。柱穴45の柱痕の埋土には炭・焼土を多量に含む。柱穴45・72には、地下式礎石がある。

柱穴列5（図版8・15） 調査区北西部で検出した南北方向の柱穴列である。方位は北に対し5度西に振る。3間分を検出し、その検出長は6mである。柱間は1.9～2.1mの不等間である。柱穴の平面形は円形・楕円形・方形が混在する。その規模は0.4m、深さ0.1～0.5mである。柱穴の掘形および柱当たりの埋土ともに炭・焼土を含まない。

柱穴列6（図版8・15） 調査区北西部で検出した南北方向の柱穴列である。方位は北に対し1度西に振る。3間分を検出し、その検出長は8.3mである。柱間は0.9～2.3mの不等間である。柱穴の平面形は円形ないしは楕円形で、その規模は0.2～0.5m、深さ0.1～0.5mである。柱穴の掘形および柱当たりの埋土ともに炭・焼土を含まない。

土坑46（図9） 調査区中央部西側で検出した。平面形は楕円形で、長径約1m、深さ0.4mである。遺物は、10A段階の土器類が出土した。

土坑122（図9） 調査区中央部で検出した。平面形は東西に長い長方形で、南北1.6m、東西1.8mである。底部の西寄りが、さらに直径0.9m程度の円形に掘り込まれる。深さは、長方形部分が0.7m、円形部分が0.3m、全体が1mとなる。遺物は、北東隅部からまとめて10A段階の土器類・鏡が出土した。

土坑172（図9、図版17） 調査区中央部西側で検出した。平面形は東西に長い楕円形で、東西1.3m、南北0.7m、深さ0.2mである。掘形内部には、直径4cmまでの礫が充填される。遺物は、土器細片がわずかに出土した。

土坑228（図9） 調査区中央部北端で検出した。北側は調査区外に広がる。検出できた平面形は半円形で、東西1.1m、南北0.5m、深さ0.3mである。埋土には炭・焼土を多量に含む。遺物は、10段階の土器類や鉄釘、壁土が出土した。

土坑250（図9） 調査区中央部で検出した。平面形は楕円形で、東西1.7m、南北1.6m、深さ0.6mである。埋土には炭・焼土を含む。遺物は、10段階の土器類や鉄釘が出土した。

土坑300（図9） 調査区中央部で検出した。堀70成立後に成立する。平面形は南北に長い隅丸方形で、南北2.0m、東西1.4m、深さ0.4mである。埋土には炭・焼土を含まない。遺物は、10A

段階の土器類・鉄釘が出土した。

土取り穴群（図版16） 調査区南部で検出した。埋土上面で柱穴19や土坑46・172が成立する。土取りは連続して行われており、一つ一つの平面形は不明瞭で、掘り下げた段階で地山面に残る掘形から概ねの単位が確認できた。南西部のものは深く掘り込まれており、深さ1.0～1.4mある。底部付近で地山の土質がオリーブ褐色極細粒砂から締まりの強い暗褐色細粒砂に変わっており、上部の土を採取していたものと考えられる。南東部で検出した土取り穴と考えられる土坑は、掘り込みが浅い。このことは調査区東部で、地山の砂礫層の標高が西部に比べ高くなっており、土取りを

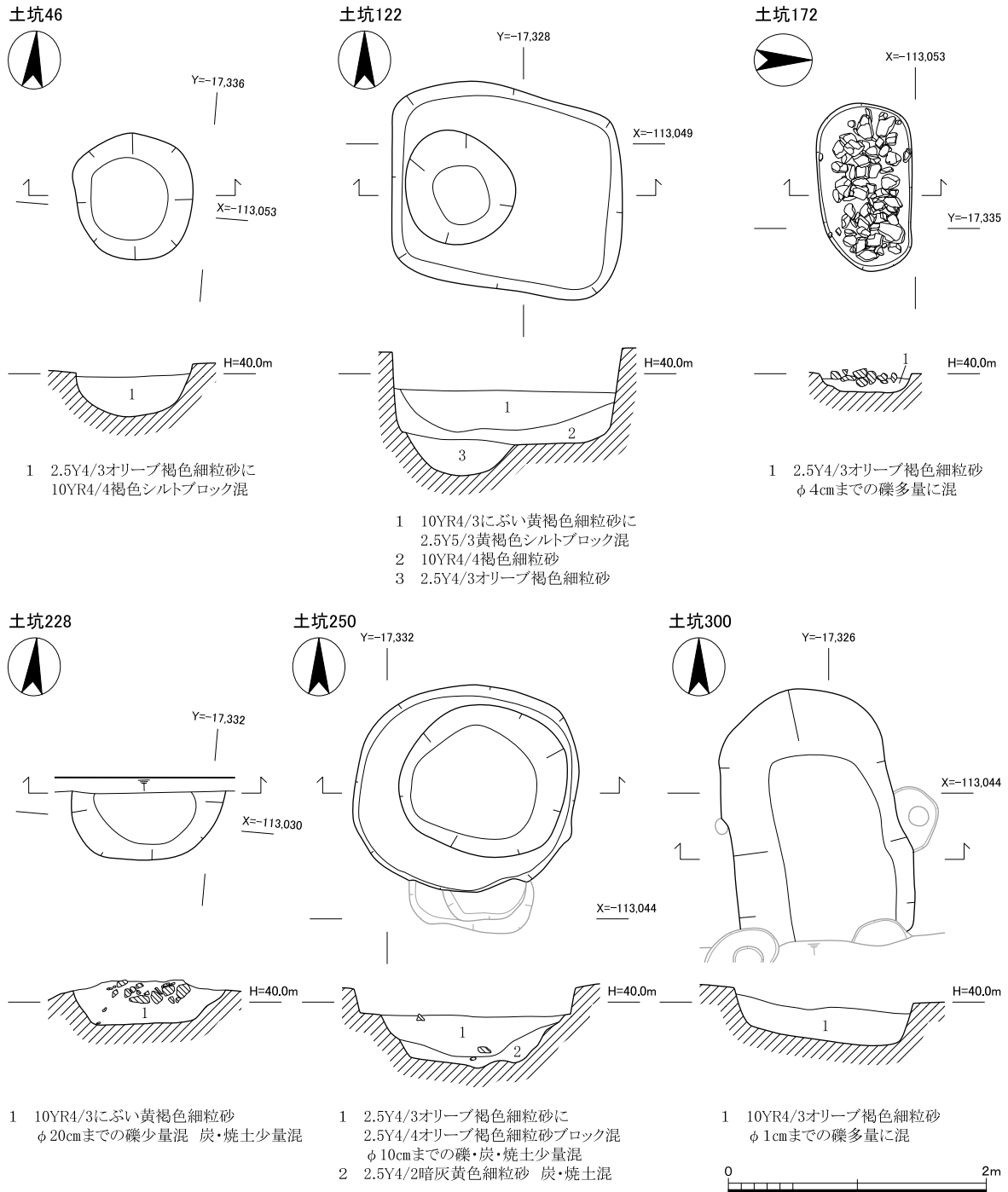


図9 土坑46・122・172・228・250・300実測図（1：50）

行うのに適さない土質であったためと考えられる。遺物は、平安時代から室町時代までにわたる。また、土取り穴の埋土から、墓65出土の常滑焼広口壺と接合関係にある土器片が出土したことから、土取りが行われるより前に墓65が造られていたと考えることができる。そのため、遺構の成立順序は堀70→墓65→土取り穴群→柱穴や土坑となる。

堀10(図版5・16) 調査区南端部で検出した東西方向の堀である。東西両側ともに調査区外に広がる。南側の肩部は拡張区3で部分的に検出した。北側肩部を参考にすると、方位は西に対し1度南に振る。断面形は逆台形状を呈し、検出長18m、検出幅4.9m、深さ2.3mである。底部の標高は37.9～38.0mで、ほぼ地山の砂礫層上面となっている。埋土は、南側から北側に向かって埋められる。土質は、東側と西側で様相が異なり、東側はオリーブ褐色や褐色などの細粒砂と礫を多量に含む土によって互層状に埋められている。一方で、西側の埋土には礫を多く含む層はなく、オリーブ褐色や褐色などの細粒砂といった質の近い土で埋められている。この埋土の違いは、掘り込まれた地山土の違いと見ることもでき、東半では地山の砂礫層が標高40.3m付近まで厚く堆積しているのに対し、西半では砂礫層上面が標高38.0mと低く、その上層には堀の埋土に似た土が厚く堆積している。遺物は、平安時代と室町時代の土器類がわずかに出土している。

(5) 江戸時代の遺構(図版1)

池状遺構260(図10、図版17) 調査区北東部で検出した。東側は調査区外に広がる。平面形は三角形となる。検出規模は南北4.9m、東西6.5m、深さ0.5mで、完掘時の底部の標高は39.5mである。埋土は大きく上層(図10-1～5層)と下層(図10-6～10層)の上下2層に大別することができる。下層上面(図10-6～8層)の池の北側で礫敷きを、中央部で瓦をまとまって検出した。礫敷きは池の北側で部分的に検出した。その範囲は、南北1.3m、東西1.9mである。20cmまでの礫を用い、目地が通る部分が見られるが、その性格は明らかではない。下層には、砂混じりの暗灰黄色細粒砂やオリーブ褐色細粒砂が堆積する。出土遺物の大半は室町時代後期のものであるが、埋土や礫敷きの下部から江戸時代後期の遺物がわずかに出土した。

註

- 1) 出土人骨の形質学的鑑定について、京都大学佐々木智彦准教授に依頼し、その所見をもとに本文を作成した。



- | | |
|--|----------------------|
| 1 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂に2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂ブロック混 炭・焼土少量混 | 8 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂 |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂 粘性強 | 9 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘性強 |
| 3 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂 粘性強 | 10 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂 |
| 4 2.5Y4/2暗灰黄色シルト | 11 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂 |
| 5 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂 φ～2cmまでの礫少量混 | 12 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂 |
| 6 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂に2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂ブロック混 | 13 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂 |
| 7 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂 粘性強 | |

図10 池状遺構260実測図(1:50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

調査では整理コンテナにして30箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・金属製品・石製品・骨などがある。出土遺物の大部分は土器類が占め、その他の種類は少ない。時代別では、室町時代後期の遺物が大半を占め、平安時代と江戸時代の遺物がわずかに出土している。

以下では主要な遺構から出土した遺物について種類ごとに概要を述べる。遺物の時期の表記は、土師器は平尾政幸氏の土器編年案¹⁾を準用する。

(2) 土器類

平安時代の土器 (図11)

柱穴や室町時代の遺構から、平安時代中期末から後期初頭にかけての土器が少量出土した。

柱穴163出土土器 土師器のみが出土した。土師器には皿A (1) がある。時期は4C段階に属する。

柱穴307出土土器 土師器のみが出土した。土師器には皿Ac (2)・皿A (3・4) がある。時期は4C段階に属する。

柱穴292出土土器 土師器・須恵器・輸入陶磁器があるが、図示できるものは輸入陶磁器のみである。輸入陶磁器には白磁碗 (5) がある。

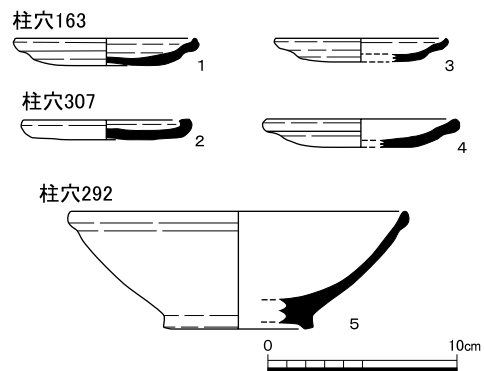


図11 平安時代の土器実測図 (1 : 4)

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、輸入陶磁器、金属製品		土師器4点、輸入陶磁器1点、金属製品2点		
室町時代	土師器、瓦器、灰釉系陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品、人骨		土師器34点、瓦器3点、灰釉系陶器1点、焼締陶器2点、施釉陶器1点、輸入陶磁器2点、瓦類6点、石製品1点、人骨一括		
江戸時代	染付磁器				
合計		40箱	56点 (10箱)	0箱	30箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

室町時代の土器 (図12・13)

墓65出土土器 焼締陶器が出土した。常滑焼広口壺(6)で、口縁端部および底部を欠損する。体部最大径46.9cm、残存高39.8cmである。時期は14世紀代と考えられる。

土坑122出土土器 土師器・灰釉系陶器・瓦器・金属製品(銅鏡)が出土した。土師器には皿Sh(7)・皿Sb(8~21)・皿S(22~25)がある。皿Shは口径6.8cm、器高1.4cmである。皿Sbは口径8.7~9.2cm、器高1.5~1.8cmである。皿Sは口径11.3cm、器高2.0cmと口径13.4~16.0cm、器高2.0~2.3cmの2群がある。瓦器には火鉢(26)がある。口径40.8cm、残存高11.8cmである。体部外面の口縁部下に2条、下端に1条の突帯がある。脚部が付くと考えられるが、残存していない。時期は10A段階に属する。

土坑46出土土器 土師器・瓦器・金属製品(鉄釘)が出土したが、図示できるものは土師器のみである。土師器には皿Sb(27)・皿S(28~33)がある。皿Sbは口径8.7cm、器高1.7cmである。内外面に煤が付着する。皿Sは口径12.0cm、器高1.9cmと口径14.0~14.4cm、器高2.1cmと口径17.6cm、器高3.0cmの3群がある。時期は10A段階に属する。

土坑300出土土器 土師器・灰釉系陶器・金属製品(鉄釘)が出土したが、図示できるものは灰釉系陶器のみである。灰釉系陶器には小椀(34)がある。

土坑9出土土器 土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦類・金属製品が出土した。土師器には皿Sb(36・37)・耳皿(35)がある。皿Sbは口径9.2~9.4cm、器高1.7~2.0cmである。35は長

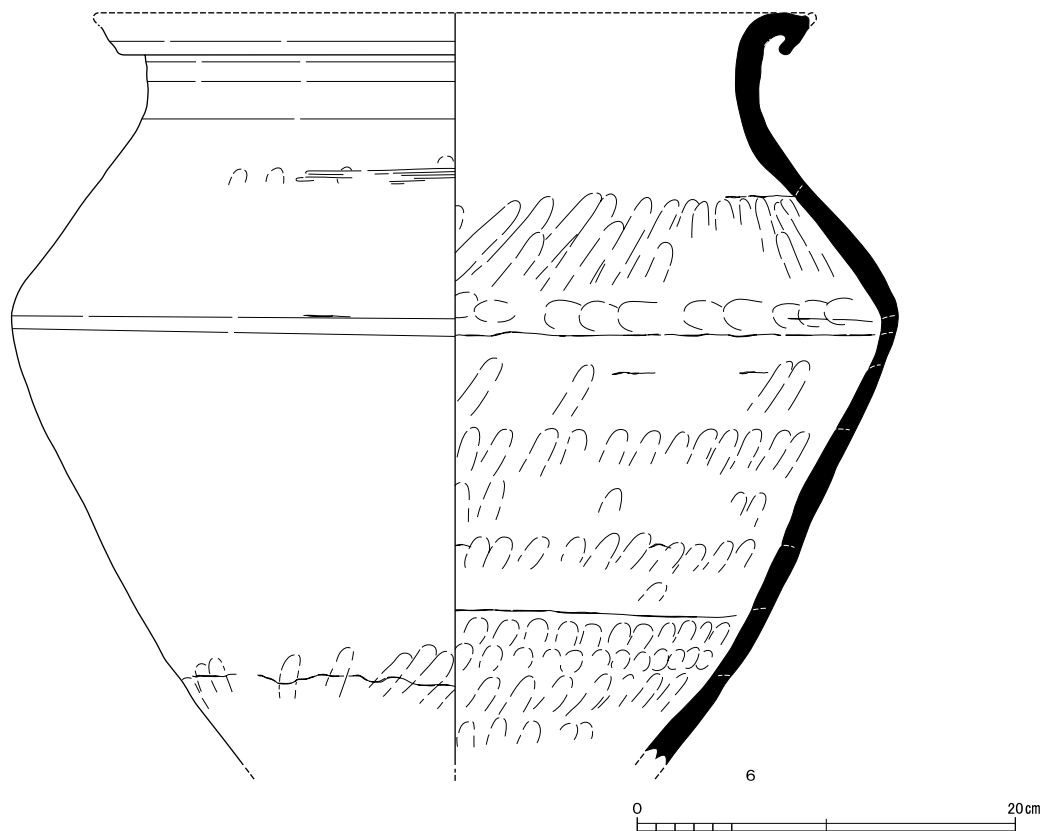
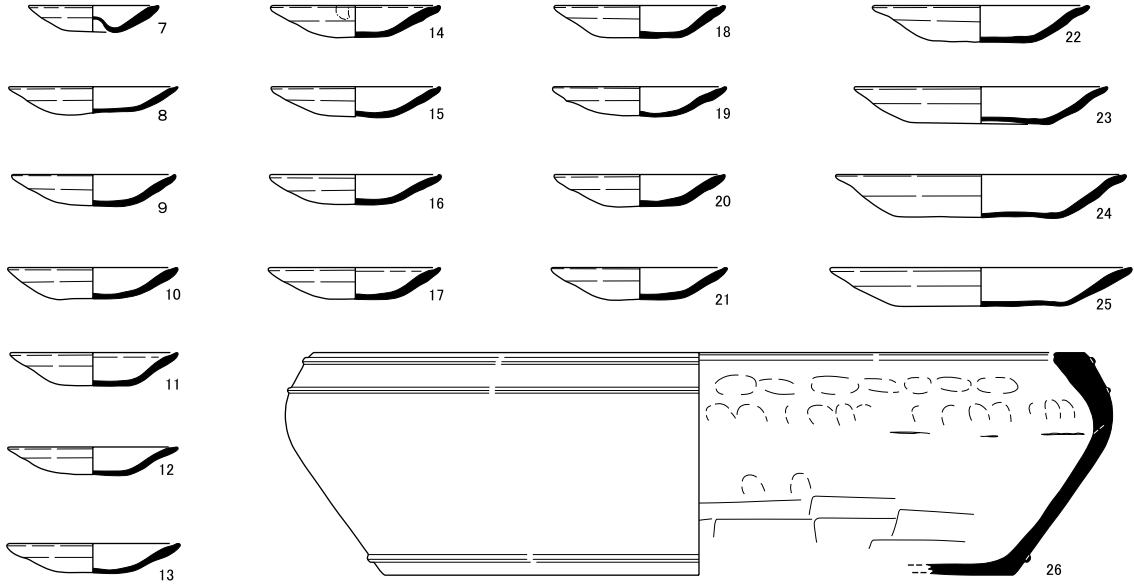
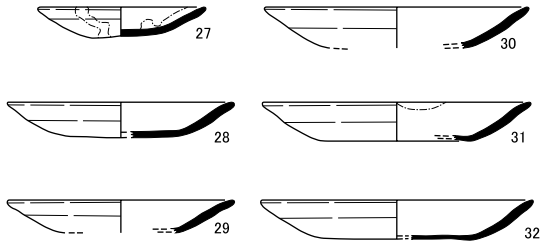


図12 墓65出土土器実測図(1:4)

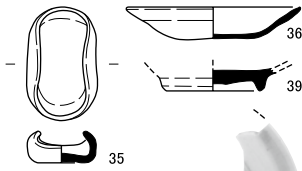
土坑122



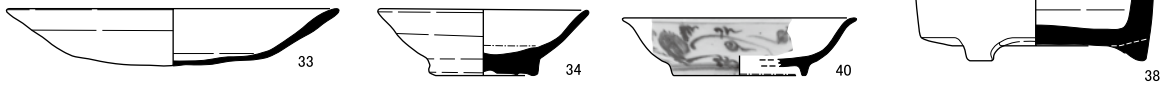
土坑46



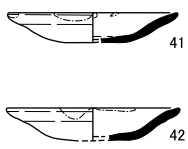
土坑9



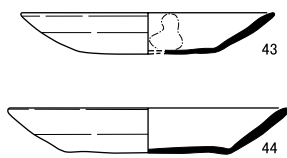
土坑300



土坑20



土坑250



地下室126

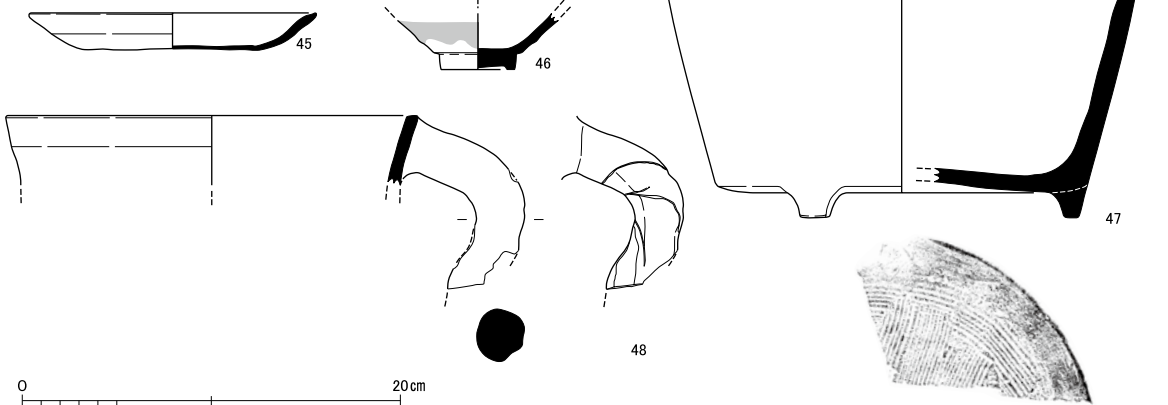


図13 室町時代の土器実測図 (1 : 4)

軸6.0cm、短軸3.8cm、器高1.7cmである。瓦器には香炉(38)がある。口径12.0cm、器高13.2cmである。3箇所に脚部が付く。輸入陶磁器には青磁(39)・青花皿(40)がある。39の底部外面には朱書がわずかに見られるが、残存状況が悪く図示や判読はできない。龍泉窯系。40は景德鎮窯系。時期は10A段階に属する。

土坑20出土土器 土師器・瓦器・灰釉系陶器が出土したが、図示できるものは土師器のみである。土師器には皿Sb(41・42)がある。口径8.8～9.0cm、器高1.6～1.8cmである。時期は10A段階に属すると考えられる。

土坑250出土土器 土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦類・金属製品(鉄釘)・焼けた壁土片が出土したが、図示できるものは土師器のみである。土師器には皿S(43・44)がある。口径13.2～14.8cm、器高2.2～2.5cmである。時期は10A段階に属すると考えられる。

地下室126出土土器 土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦類・金属製品(鉄釘)・滓・焼けた壁土が出土した。土師器には皿S(45)がある。口径15.2cm、器高2.0cmである。施釉陶器には瀬戸美濃系の天目椀(46)がある。瓦器には火鉢(47)がある。口径27.6cm、器高23.8cmである。底部外面にはハケ目が残る。焼締陶器には把手付鉢(48)がある。口径21.7cm。把手は粘土を掘じった痕を明瞭に残す。備前焼と見られる。時期は10A段階に属する。

(3) 瓦類 (図14)

今回の調査では、江戸時代の池状遺構260から室町時代の瓦が遺物整理箱2箱分出土した。この他の遺構からの出土量はわずかである。瓦の種類は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦、道具瓦である。

軒丸瓦(瓦1) 瓦1は巴文軒丸瓦である。池状遺構260から出土した。左巻き三巴の尾部が長く伸び、界線となる。外区には珠文が配置される。丸瓦部凸面は縦方向のケズリ、凹面には布目が残る。焼成はやや軟質で、色調は外面が黒色、断面は灰色である。胎土には1mmまでの白色砂粒を含む。同文の軒丸瓦が調査10・11で出土している。

軒平瓦(瓦2・3) 瓦2は唐草文軒平瓦である。重機掘削中に出土した。瓦当成形は、顎部貼り付けによる。瓦当顎部から裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面には布目がわずかに残る。焼成はやや硬質で、色調は外面・断面ともににぶい褐色である。胎土には1mmまでの白色砂粒を含む。同文の軒平瓦が調査10・11で出土している。

瓦3は唐草文軒平瓦である。池状遺構260から出土した。瓦当成形は、顎部貼り付けによる。瓦当顎部から裏面は横方向のナデを施す。平瓦凹面の縁部には水返し部が剥離した痕跡がある。焼成はやや硬質で、色調は外面が暗灰色、断面は灰色である。胎土には1.5mmまでの白色砂粒を含む。同文の軒平瓦が調査11で出土している。

輪違い(瓦4) 瓦4は小型の丸瓦で、輪違いと考えられる。池状遺構260から出土した。凹面には布目とコビキ痕が残る。焼成は硬質で、色調は外面・断面ともに暗灰色である。胎土には1mmまでの白色砂粒を含む。

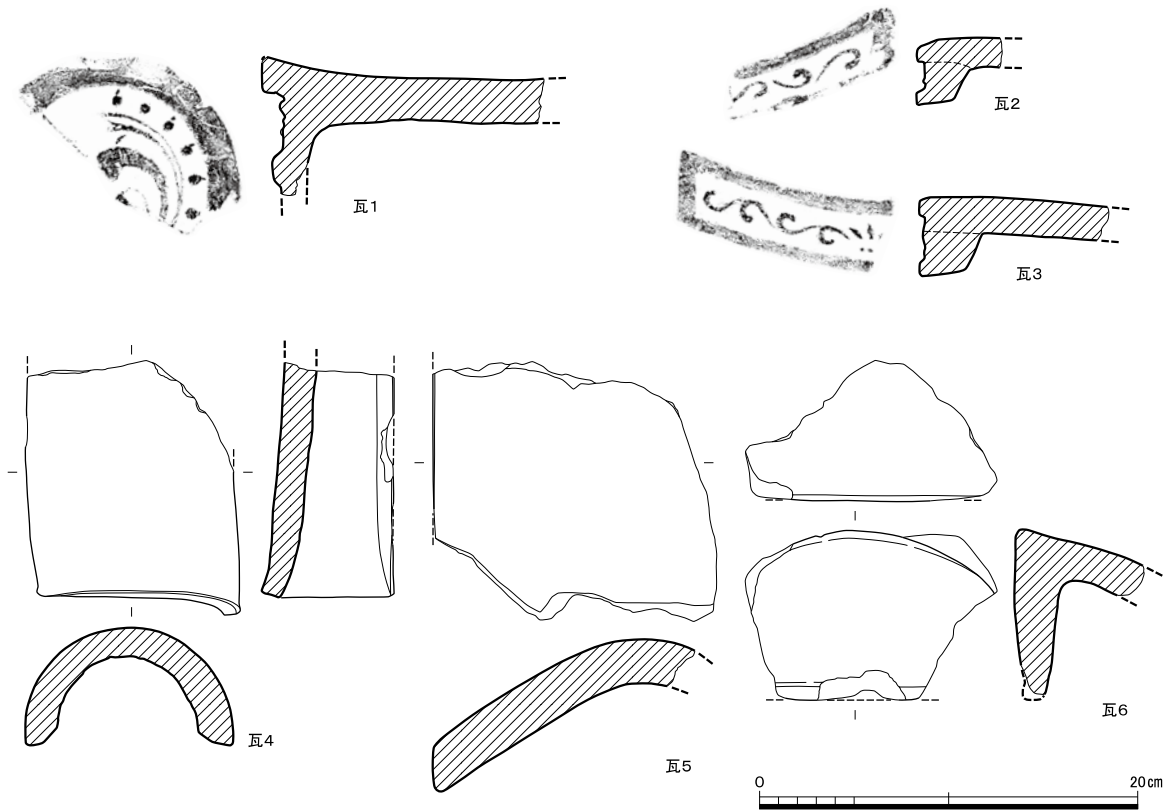


図14 瓦類拓影及び実測図（1：4）

雁振瓦（瓦5） 地下室126から出土した。凸面には縦方向のミガキを施し、凹面には布目とコビキ痕が残る。焼成はやや硬質で、色調は外面・断面ともに褐灰色である。胎土には1mmまでの白色砂粒を含む。

道具瓦（瓦6） 池状遺構260から出土した。無文の軒部に対し、およそ45度の角度で丸瓦が接合する。欠損しているため不明確ではあるが、軒部は半円であると思われる。丸瓦凸面には縦方向のミガキを施す。焼成はやや硬質で、色調は外面・断面ともに褐色である。胎土には1mmまでの白色砂粒を含む。

（4）金属製品（図15）

銭貨 金1 は熙寧元寶である。いわゆる北宋銭で熙寧元年（1068）初鑄である。炉状遺構57被熱面直上から出土した。

金属製品 金2 は鏡の破片で、全体の4割程度が残存する。銅鑄造による。鏡背面に草花文を配した小型の八稜鏡である。残存長3.7cm、残存幅6.7cm、厚さ1.5～3.0mm、重量22.883gである（付章2参照）。復元最大長は7.6cmである。鏡背面は、鏡外縁から1cmのところまで段となり、この段を境に外区と内区に分かれる。外区には唐草文と雲文、内区には

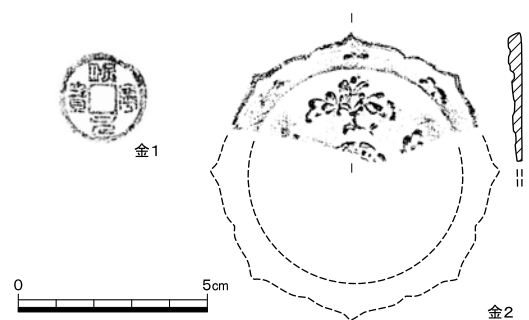


図15 金属製品拓影及び実測図（1：2）

草花文を配置する。内区の草花文は枝葉を大きく外側に広げ、茎部の端は時計回りに偏向する。草花文の右手にも文様の一部がわずかに見られる²⁾。鈕座は花形を呈し、その中に蕊が表現されている。日本産で、その製作年代は10世紀後半から11世紀前半にかけてと考えられるが、室町時代の土坑122より出土した。

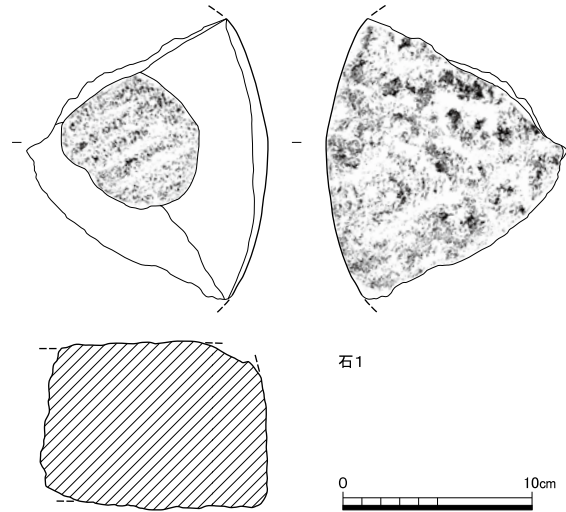


図16 石製品実測図（1：4）

(5) 石製品（図16）

石1は石臼である。残存長14.8cm、残存幅12.7cm、厚さ8.9cm、重量1.5kgである。石材は黒雲母を含む花崗岩である。平面形は円形と考えられる。上面には複数の条線があり、下面には加工痕が残る。江戸時代の池状遺構260より出土した。

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B A B	A B	

- 2) わずかに残る文様は鳥文である可能性がある。この他にも鏡の所見については、叡山学院教授の久保智康教授にご教示いただいた。

5. まとめ (図17～19)

今回の調査では、山科本願寺の中枢部とされる御本寺の南半部で調査を行い、平安時代、平安時代から室町時代前期、室町時代後期、江戸時代の遺構を検出した。特に山科本願寺期にあたる室町時代後期については、2時期に分けることができ、寺域内の変遷と空間利用のあり方を明らかにすることができた。以下では、その成果について各時期の遺構の変遷をまとめることとする。

平安時代 柱穴や土坑をわずかに検出したのみで、建物などを復元することはできなかった。山科本願寺の寺域内では、この時期の遺構はほとんど見られないが、遺物は散見される。遺構・遺物ともに確認できた調査としては、遺跡の南西部で行われた調査30(図5・19、表1)がある。調査30では、平安時代中期末から後期前半にかけての掘立柱建物、溝、土坑、柱穴が検出されている。鍛冶関連遺物の出土などから、工房の存在が想定されている。この調査以外に具体的な様相がわかる例がないため、現在のところ、この時期の遺跡を評価することは難しい。今回の調査によって当該期の遺跡が一定の広がりを持っていることが確認できた点は成果といえる。

平安時代から室町時代前期 当該期の遺構としては、調査区中央部で検出した東西方向の堀70がある。出土遺物が少なく、遺物から時期を判断することは難しいものの、この堀は平安時代後期初頭の柱穴163を掘り込み、埋没後に、上面から14世紀代の墓65が成立することから、時期は平安時代後期から室町時代の時間幅の中で考えることができる。本調査地の西側120m地点で行われた調査18(図5・19、表1)で検出された堀7のほぼ延長線上にあたり、その規模や形状は似ているが、時期が異なるため、現状では別の遺構と考えざるを得ない。堀70は調査区外のどこかで屈曲ないしは掘り止まると思われる。その性格については今後の検討が必要であるが、山科本願寺期以前に遡る堀の存在が明らかになった¹⁾点は、今後の周辺における調査やその評価に関わってくるものと考えられ、山科本願寺以前の状況を考える上で重要な調査成果になる。

室町時代前期 墓7基と炉状遺構1基を検出した。時期が判断できる遺物は墓65出土の広口壺のみだが、墓65・177、炉状遺構57出土の焼骨や炭化物の年代測定を行ったところ、いずれも14世紀代にまとまる年代結果が得られ(付章1参照)、出土遺物と矛盾しないことが明らかになった。また、全ての墓で遺物や年代測定によって時期を判断できている訳ではないが、検出状況などから一時期に連続して造られたものと考えられる。これらの墓は、調査区中央部西半に東西方向に並び、火葬墓と土葬墓が混在する。火葬墓は墓65・177・178、土葬墓は墓39・176・194・199である。墓177・178では直径15cm程度の有機質性の円筒形の骨蔵器に焼骨を収めている。この2基は近接して造られ、用いられた骨蔵器の形態も同じであることから、強い関係性にあったと考えられる。墓65からは3個体分の焼骨が出土した。検出状況から埋葬時の状況が保たれているとは考えがたく、集積ないしは後世に動かされた結果と見ることもできるが、実態は不明である。これらの墓と近接して、炉状遺構57を検出した。墓と同時期であることや位置関係、構造、埋土などから焼き場の可能性も考えられる。仮に炉状遺構57を焼き場とすると、墓と焼き場の関係がわかる貴重な例となる。墓の存在から周辺には同時期の集落があったことが示唆される。

室町時代後期1期 当該期の遺構としては、東西方向の堀10と土取り穴群を検出した。調査区南端部で検出した東西方向の堀10は、幅4.9m、深さ2.3mと大規模で、断面形は箱形を呈する。本調査地の南側で行われた調査33（図5・19、表1）で検出された堀229は、幅5m、深さ2.64m、西に対し南に1度傾斜しており、本調査の堀10とは非常に似た様相を見せる。堀229の西側と東側で、延長と考えられる堀の一部が確認され、東側は北側に向かって屈曲すると想定されている。この2条の堀は、共通する様相を示すことから、同時期に機能していたと考えるのが妥当で、一体的な遺構として見る事ができる。どちらの堀も人為的に埋められており、堀埋土の断面観察から北側の堀10は南側から、南側の堀229は北側から埋められている。このことは堀と堀の間から埋土が供給されていることを示しており、この間に土塁状の施設があった可能性がある²⁾。これらの堀の間は約27mあり、これまで山科本願寺で確認されている土塁と同規模程度のものを想定しても、なお空間的な余裕がある。構造を復元することは難しいが、土塁以外に通路などの施設が造られていたのであろうか。

上記の御本寺南半部で検出された堀は、そのいずれもが埋め戻された後に居住に関わる遺構が成立している。このことから、山科本願寺の遺構としては、相対的に古層に位置付けられるが、その具体的な年代については不明である。江戸時代の「山城古図」は山科本願寺の最終形を描いていると考えられるが、絵図と対応する堀は見られないため、古い段階の山科本願寺整備の実態が反映されていると見ることもできる。

土取り穴と堀10の先後関係を遺構の重複関係や層位から明らかにすることはできなかったものの、堀が埋め戻され、土質が低下したところでは土取り行われなかったと考えるのが自然で、質の良い自然堆積土が厚く残存していた調査区南西部で、土取り穴群が集中して掘削されたものと考えられる。山科本願寺造営に伴う開発が周辺で進められていく中で、必要な土を採取したものと思われ、次の室町時代2期のような土地利用が周辺にまで及んでいた結果と見ることもできよう。

室町時代後期2期 当該期の遺構としては、建物、地下室、柱穴列、土坑、多数の柱穴を検出した。遺構数が増加し、建物や地下室といった居住を示す遺構が見られるようになる。柱穴列1は、堀10の肩口と重複し、傾きも同じあることから、堀10を踏襲した区画施設であると考えられる。この他にも、東西方向の柱穴列2・4や南北方向の柱穴列3・5・6を検出している。何かしらの区画施設と考えられる。調査区南東部には南北棟と考えられる建物1が位置する。この北側にも小規模な柱穴が多数あり、建物に復元できないものの、その存在が想定できる。建物1と重複して地下室126が位置するが、傾きや遺構埋土の状況から同時期に機能したとは考えにくい。遺構には埋土に炭・焼土を多量に含む地下室126、柱穴列1・2、土坑228・250などそうではないものがある。炭・焼土を多量に含む遺構は、天文元年（1532）の焼き討ちによって焼亡した時期に機能していたと判断できる。炭・焼土を含まない遺構もあることから、焼亡以前に一定期間、居住域として利用していたことが窺われる。

御本寺の南半部では、山科本願寺焼亡期の遺構として、調査13・17・33で埋甕群を伴う建物や調査33・37で地下室と考えられる土坑、調査14で鍛冶遺構が検出されている。また、復元できる

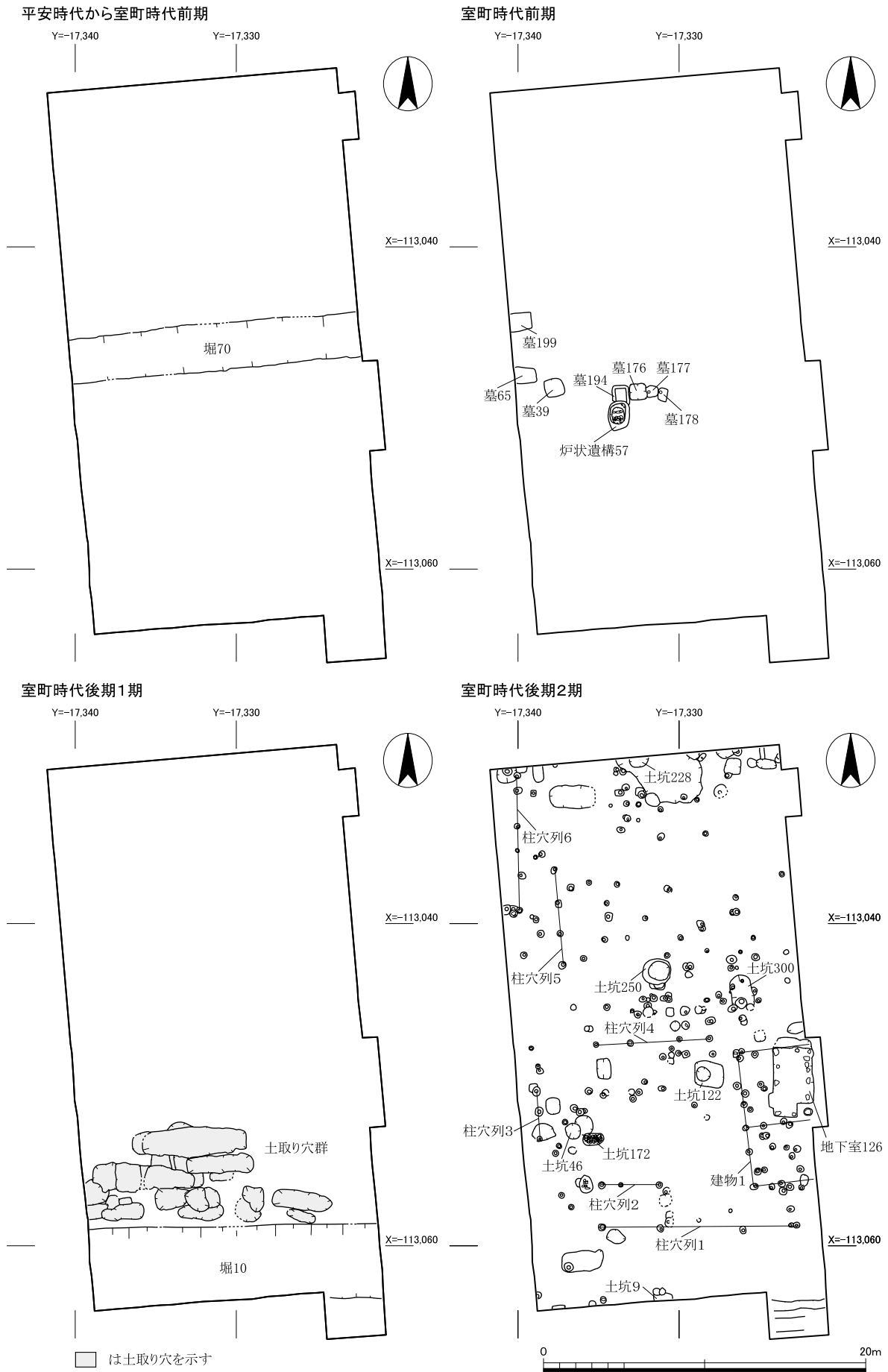


図17 主要遺構変遷図1 (1 : 350)

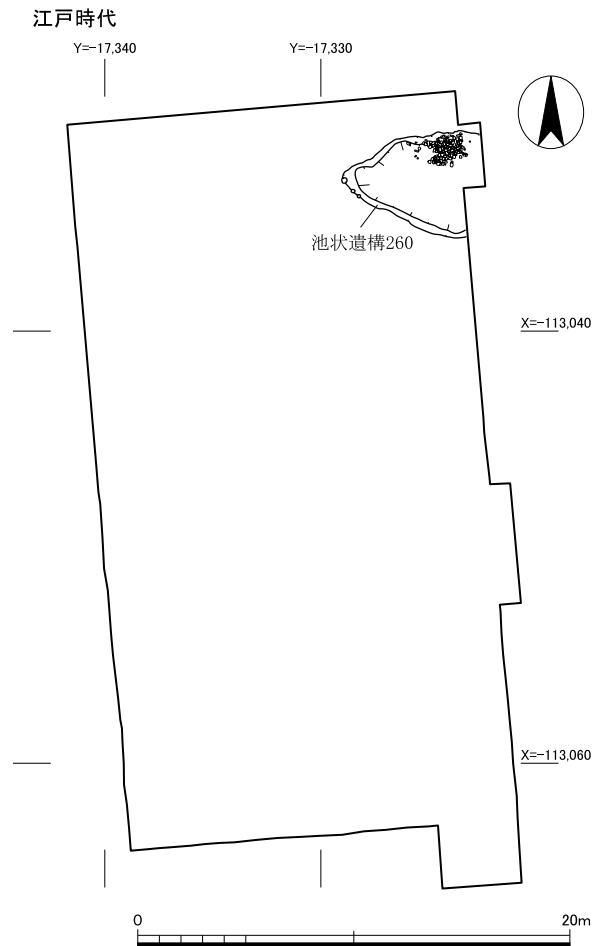


図18 主要遺構変遷図2 (1:350)

建物はいずれも小規模なもので、堂宇が存在する中枢部分とは考え難く、貯蔵や手工業生産および生活空間としての土地利用が考えられる。

なお、調査10・11では、東西方向の石組溝が検出されている。埋土から多量の瓦が出土していることから、この溝に沿って瓦葺の区画施設があったと想定できる。この区画施設の南側では、先に述べたような土地利用である一方で、この北側では宗主一族の居住空間が位置すると想定されていることから御本寺の北半と南半では空間利用が異なっていたようである。この区画施設がその境にあたる可能性がある。

江戸時代 当該期の遺構としては、池状遺構260を検出した。三角形の平面形を呈し、北側の一部に礫敷きを施す。調査区の土層断面の観察から少なくとも江戸時代には耕作地としての利用が見られることから、耕作に関

わるものと見ることもできるが、詳細は不明である。いずれにせよ、山科本願寺廃絶後の土地利用を示すものと考えられる。

註

- 1) 山科本願寺成立以前に遡る堀が存在する可能性については、調査32で既に指摘されているものの、出土遺物の年代観によっては、山科本願寺造営以後の堀として捉えうるものであるとして、その位置づけについては今後の検討とされている。そのため、明らかに山科本願寺成立以前に遡る堀と位置付けられる本調査例は貴重である。
- 2) 堀229の北側に土塁が伴っていた可能性については、すでに指摘されている。本調査で堀10を検出したことで、その可能性がより高まり、堀間の空間利用のあり方を考える材料を得ることもできた。佐藤好司『山科本願寺跡・左義長町遺跡－建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』イビソク京都市内遺跡調査報告第14輯 株式会社イビソク 2017年
また、図19を作成するにあたり、遺構図のデータを提供いただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

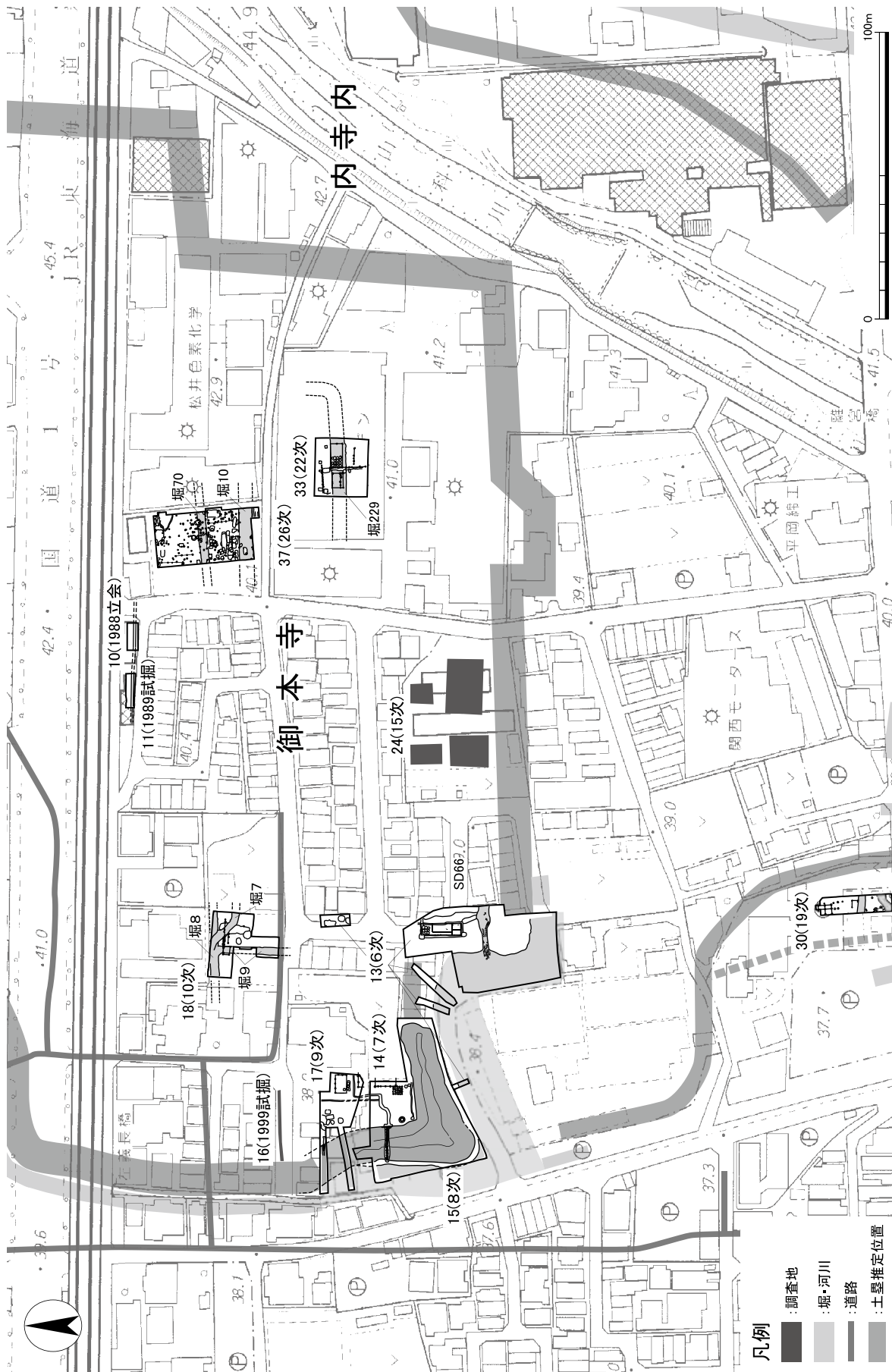


図19 周辺調査遺構配置図 (1 : 2,000)

付章 1 焼骨・炭化物の年代測定

南 雅代 (名古屋大学宇宙地球環境研究所)

分析手法

1. 骨の酢酸処理

火葬骨試料は、デンタルドリルで表面の土などの汚れを取り除いた後蒸留水で超音波洗浄し、凍結乾燥させた。その後、メノウ乳鉢を用いて粉碎した。骨粉末試料 (約 1 g) は、Balter et al. (2002) を参考にし、真空下で 1 時間、0.1M の酢酸 60mL で処理し、二次炭酸塩を除去した。

2. ^{14}C 年代測定

酢酸処理後の試料 (約 200mg) をリン酸と一晚反応させ、発生した CO_2 を精製後、鉄を触媒として水素で 620°C にて 6 時間還元し、グラファイトを作成した (Minami et al. 2013)。得られたグラファイトをアルミニウム製のカソードに詰め、名古屋大学宇宙地球環境研究所のタンデトロン加速器質量分析計 (AMS; Tandetron HVEE model 4130-AMS) により、 ^{14}C 年代測定を行った。 ^{14}C 年代の暦年較正は、IntCal20 (Reimer et al., 2020) に基づき、OxCal4.4 プログラム (Bronk Ramsey, 2021) を用いて行った。さらに CO_2 の一部は産業技術総合研究所の IR-MS (Delta-V Advantage, Thermo Fisher Scientific, Inc.) で $\delta^{13}\text{C}_{\text{VPCB}}$ を測定した。 $\delta^{13}\text{C}$ 値の誤差は 0.1% 程度である。

表 1 炉状遺構 57、墓 65・177 から出土した火葬人骨の ^{14}C 測定結果

Sample	^{14}C (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C (AD)	Lab.No
S57-2	640 ± 60	-24.1	1275-1410	NUTA2-29261
S57-3	565 ± 60	-25.6	1297-1442	NUTA2-29262
S57-6	655 ± 60	-23.5	1269-1409	NUTA2-29263
S65-1	545 ± 60	-17.2	1300-1450	NUTA2-29268
S65-3	560 ± 60	-25.6	1297-1443	NUTA2-29264
S177-1	620 ± 60	-23.2	1280-1415	NUTA2-29265
S177-2	595 ± 60	-23.3	1285-1426	NUTA2-29266
S177-3	610 ± 60	-26.6	1284-1420	NUTA2-29267

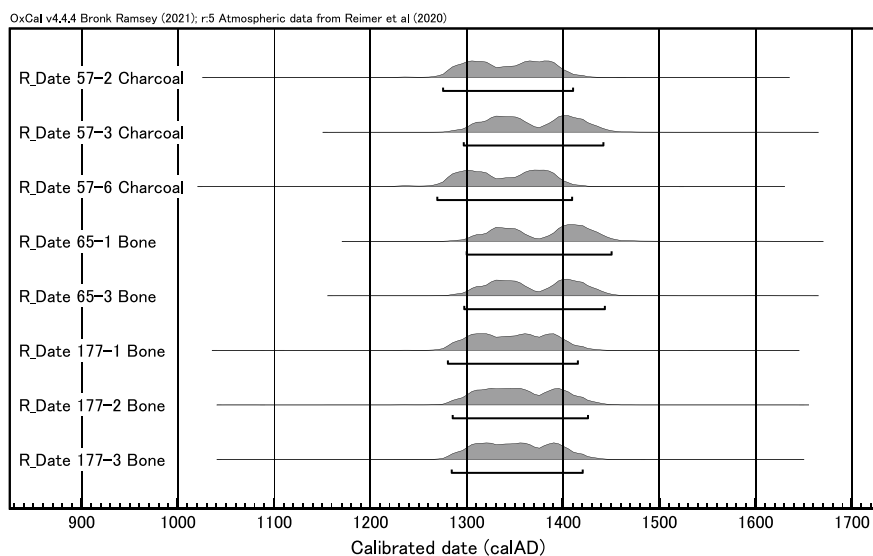


図 1 炉状遺構 57、墓 65・177 から出土した火葬人骨の ^{14}C 暦年較正年代

付章2 八稜鏡の自然科学分析

関 晃史（京都市埋蔵文化財研究所）

山田卓司（龍谷大学文学部歴史学科）

はじめに

対象試料とした八稜鏡（金2）が出土した遺構の年代は、山科本願寺が焼き討ちに遭う天文元年（1532）以前の16世紀前葉頃と推定される。試料は破損しているため、把握できる文様は半分にも満たず、草花鏡に分類しているものの、破面に近い箇所では鳥の尾羽ともみえる文様もあり、瑞花双鳥鏡の可能性も有している。鏡の形式からは概ね10世紀後半から11世紀前半の所産と考えられる。ここでは、本試料に対して実施したX線透過撮影、蛍光X線分析について、その成果を報告する。

分析方法

X線透過撮影には龍谷大学文学部歴史学科文化財科学室設置のX線発生装置（（株）リガク社製RadioKlex-200EGM2）、イメージングプレート（富士フィルム（株）社製CR ST-VI：25.2×30.3 cm）、画像処理装置（（株）リガク社製CR-1012）を用いた。撮影条件は150kV, 5 mA, 10secである。また、蛍光X線分析による材質調査には同室設置の蛍光X線分析装置（（株）日立ハイテクサイエンス社製EA1000VX）を用いた。蛍光X線における分析箇所は鏡面と鏡背面の内区と周縁部、また、背面周縁部にみられる白色を呈する腐食箇所の計5箇所である。蛍光X線分析の条件は各結果と共に記す。

分析結果

X線透過撮影画像を図1に、蛍光X線分析結果のうち、鏡面、鏡背面の内区における検出元素と分析条件を図2・3に示し、以下に概要を述べる。

X線透過撮影画像の観察では、腐食で生じた密度差が明瞭に表れており、肉眼で周縁部にみられる白色箇所以外にも、腐食が進行した箇所を確認できる。また、試料内部に気泡（巣）とみられる箇所を確認できるが、鑄造時の湯流れ等を示す様な痕跡は確認できなかった。

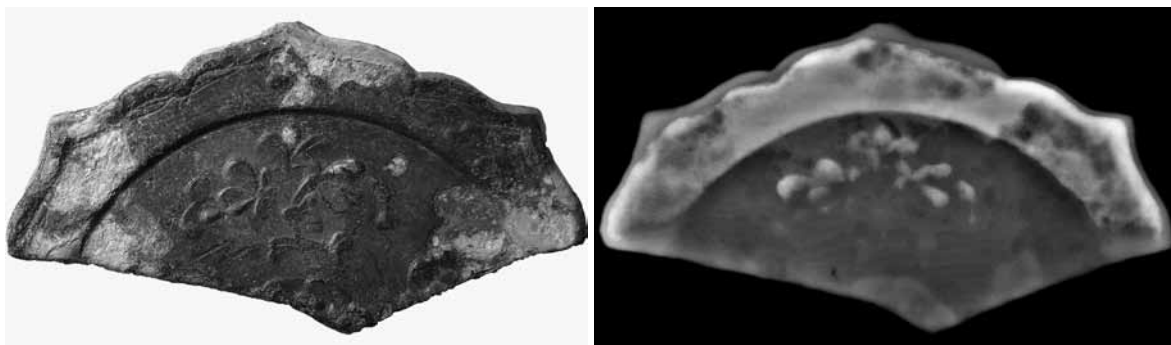


図1 試料像（鏡背面）とX線透過撮影画像

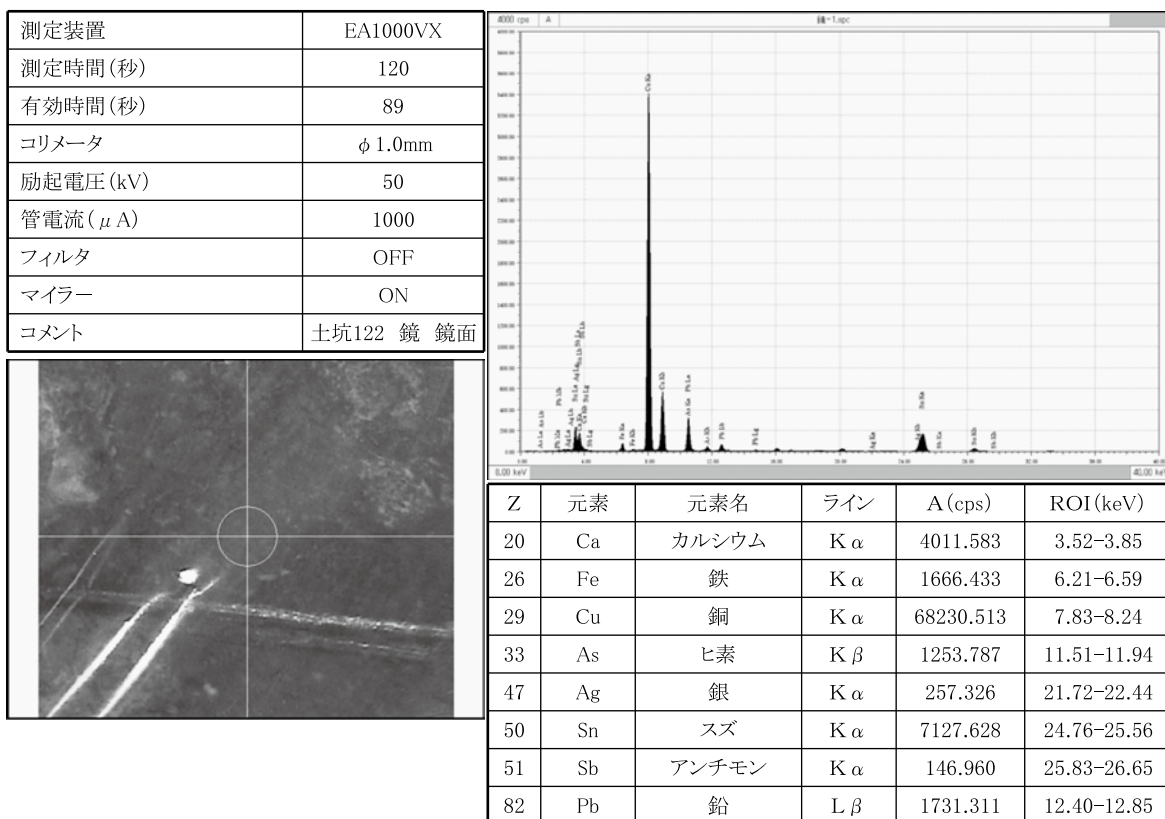


図2 鏡面の分析条件と検出元素一覧

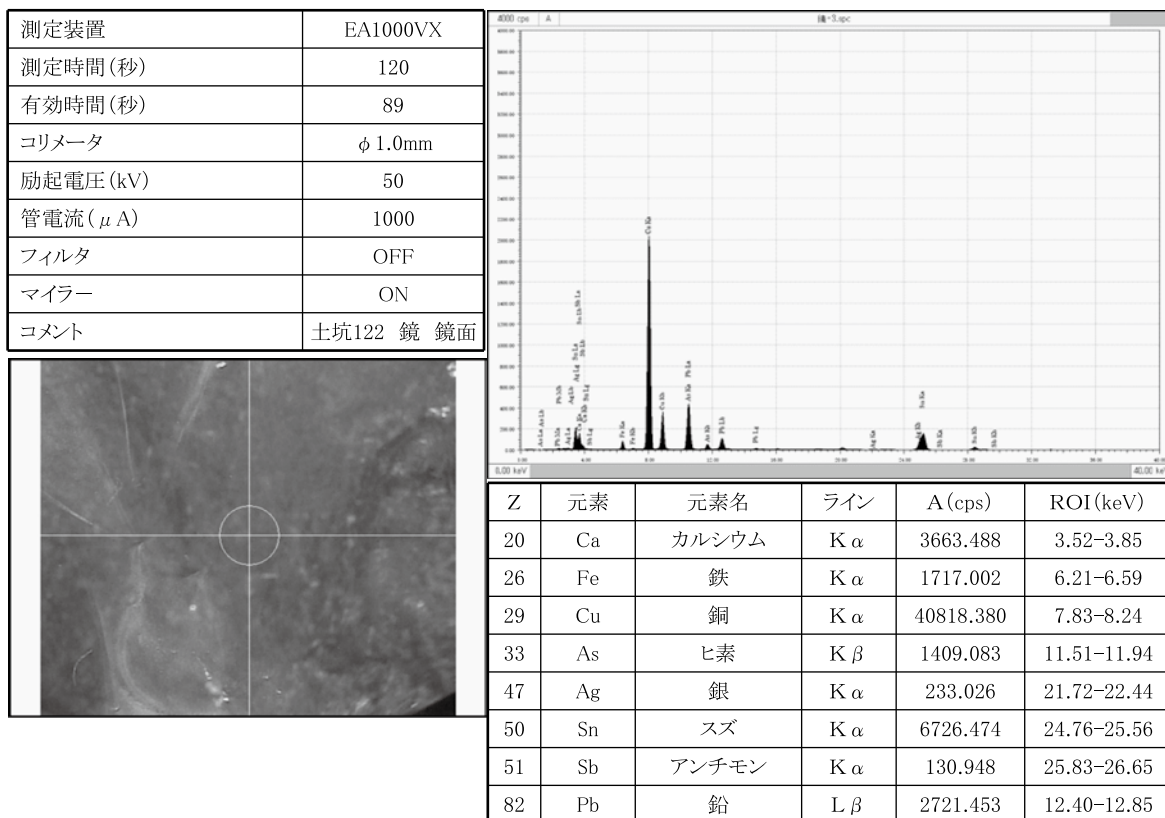


図3 鏡背面の分析条件と検出元素一覧

蛍光X線分析において検出した元素は、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、銅 (Cu)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、鉛 (Pb) である。このうちカルシウムと鉄は土壌由来成分と考え、試料は銅、スズ、鉛からなる青銅製と判断した。その他の元素であるヒ素、銀、アンチモンについては鑄造時の湯流れを良くする目的で添加された可能性を提示しておく¹⁾。また、試料の鏡面と背面におけるスズの検出傾向には大きな差はなく、水銀 (Hg) を検出していないため、鏡面に鍍錫が施されていたかは不明とする。

平安時代の鏡を分析した先行研究として、中川氏と降幡氏が古墳時代から鎌倉時代の鏡185面を対象に蛍光X線定量分析を行った研究がある²⁾。そこで両氏は銅、スズ、鉛、ヒ素の含有割合には年代(文様)による傾向が表れていると指摘しており、スズを2.0wt%以上含むA群と、それ未満のB群に大別している。A群は更にスズ含有量が約30wt%のA1群と約5~20wt%のA2群に細分し、古墳後期と奈良時代の鏡、及び平安時代瑞花双鳥鏡で先行して出現する鳳凰系文の鏡にはA1群、A2群が共にみられるが、次いで出現する平安時代瑞花双鳥鏡の鴛鴦系文と他の鳥文にはA1群のみみられないといった特徴が見出されている。一方、平安時代の草花鏡にみられる傾向として、スズ含有量は様々でまとまりはないが、鉛含有量が約5~10wt%の値を示す特徴があるとしている。

本試料の分析結果は表面研磨なしで測定した定性分析結果であり、両氏の研究と比較することは難しいが、白色を呈する腐食箇所を除く4箇所の銅、スズ、鉛、ヒ素の測定値を半定量値(重みづけのないFP値)で試算したところ、銅が約41wt%、スズが約53wt%、鉛が約4.2wt%、ヒ素が約1.5wt%であった。分析は錆層を除去せず行っているため、スズの高い検出量は腐食の影響を受けている可能性があり、あくまで参考値に留めるものであるが、両氏が平安時代の草花鏡、または瑞花双鳥鏡でA群と分類する鏡と矛盾しない結果と考えられる。

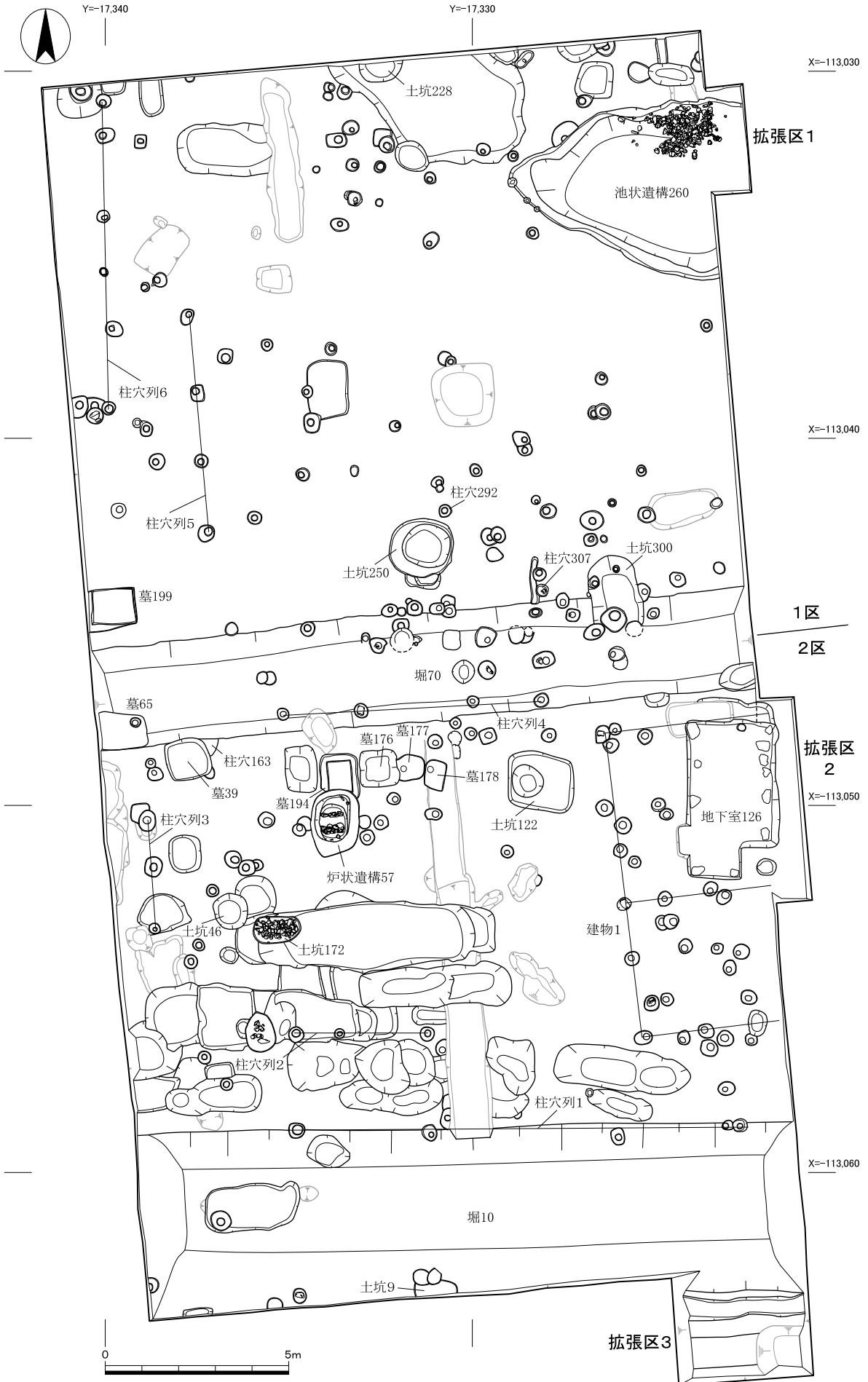
註

- 1) 久保智康氏よりご教示を受けた。
- 2) 中川あや・降幡順子「日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵 男体山頂遺跡出土鏡の研究」『飛鳥資料館研究図録第17冊 東アジア金属工芸史の研究17』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・日光二荒山神社 2014年

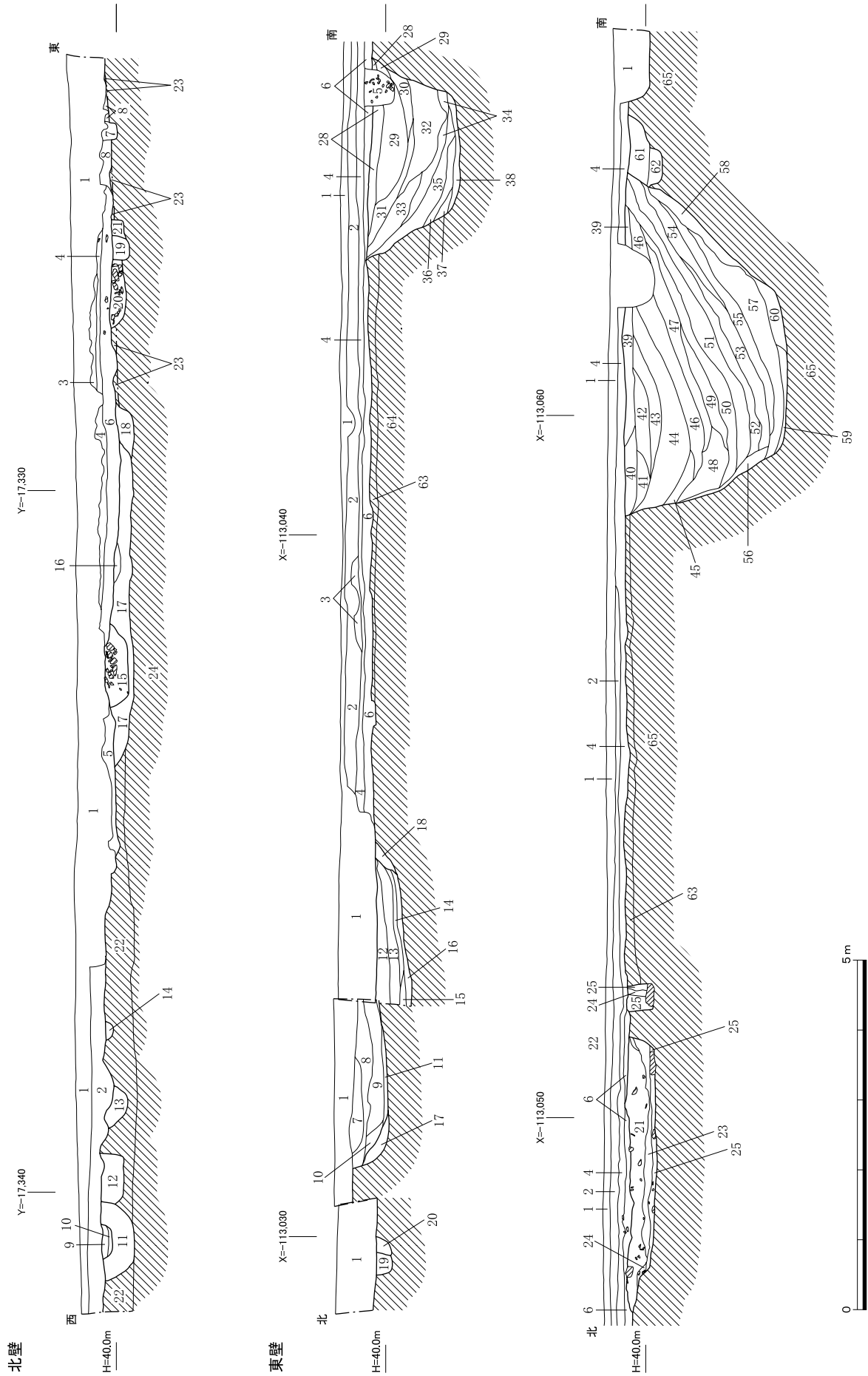
参考文献

- 久保智康『日本の美術3 No.394中世・近世の鏡』至文堂 1999年
『日本の美術10・11 No.42和鏡』至文堂 1969年
『研究図録シリーズ7 和鏡賞鑑-図像でたどる千歳のねがい-』公益財団法人黒川古文化研究所 2020年

圖 版

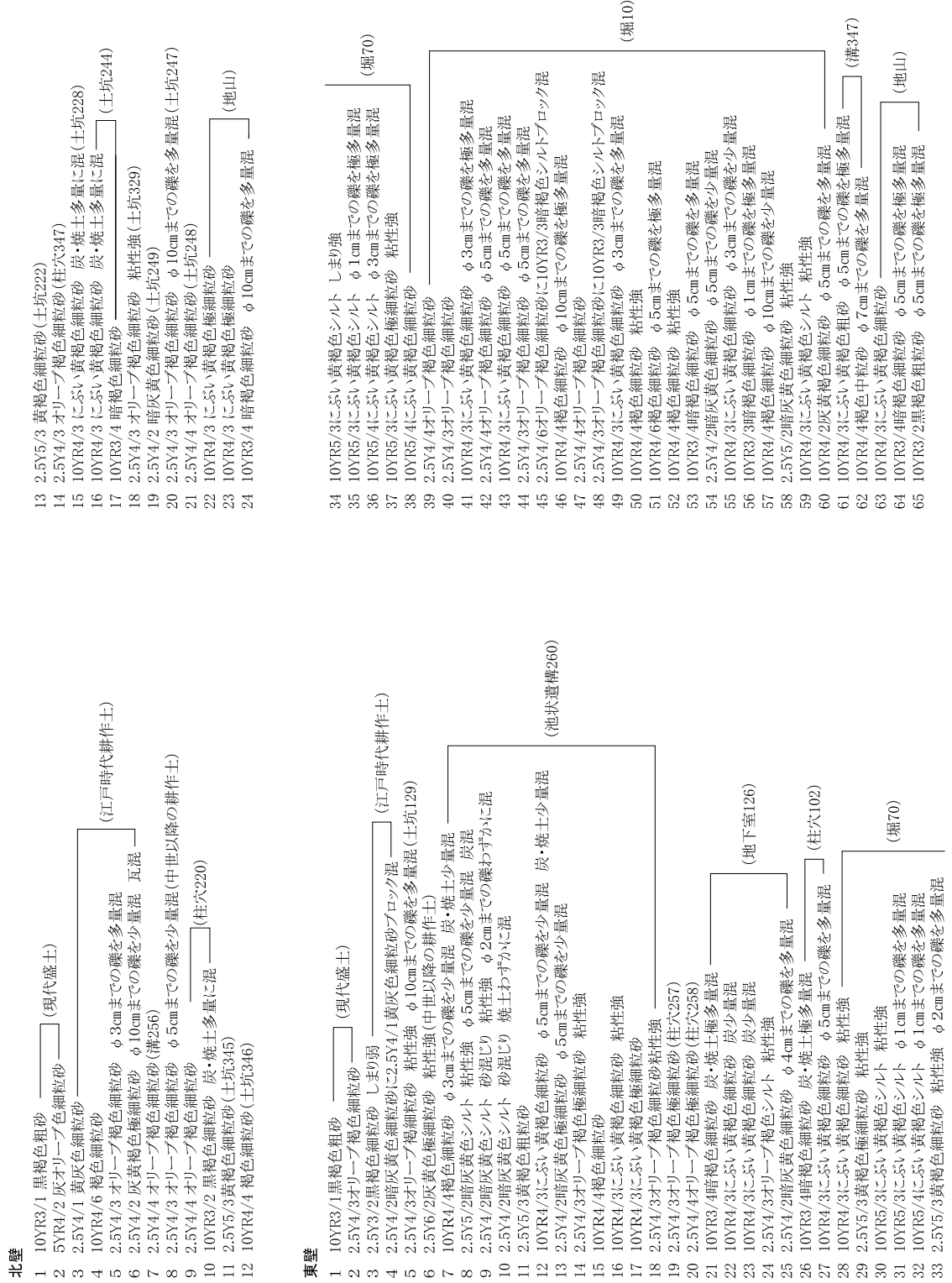


遺構平面図 (1 : 150)

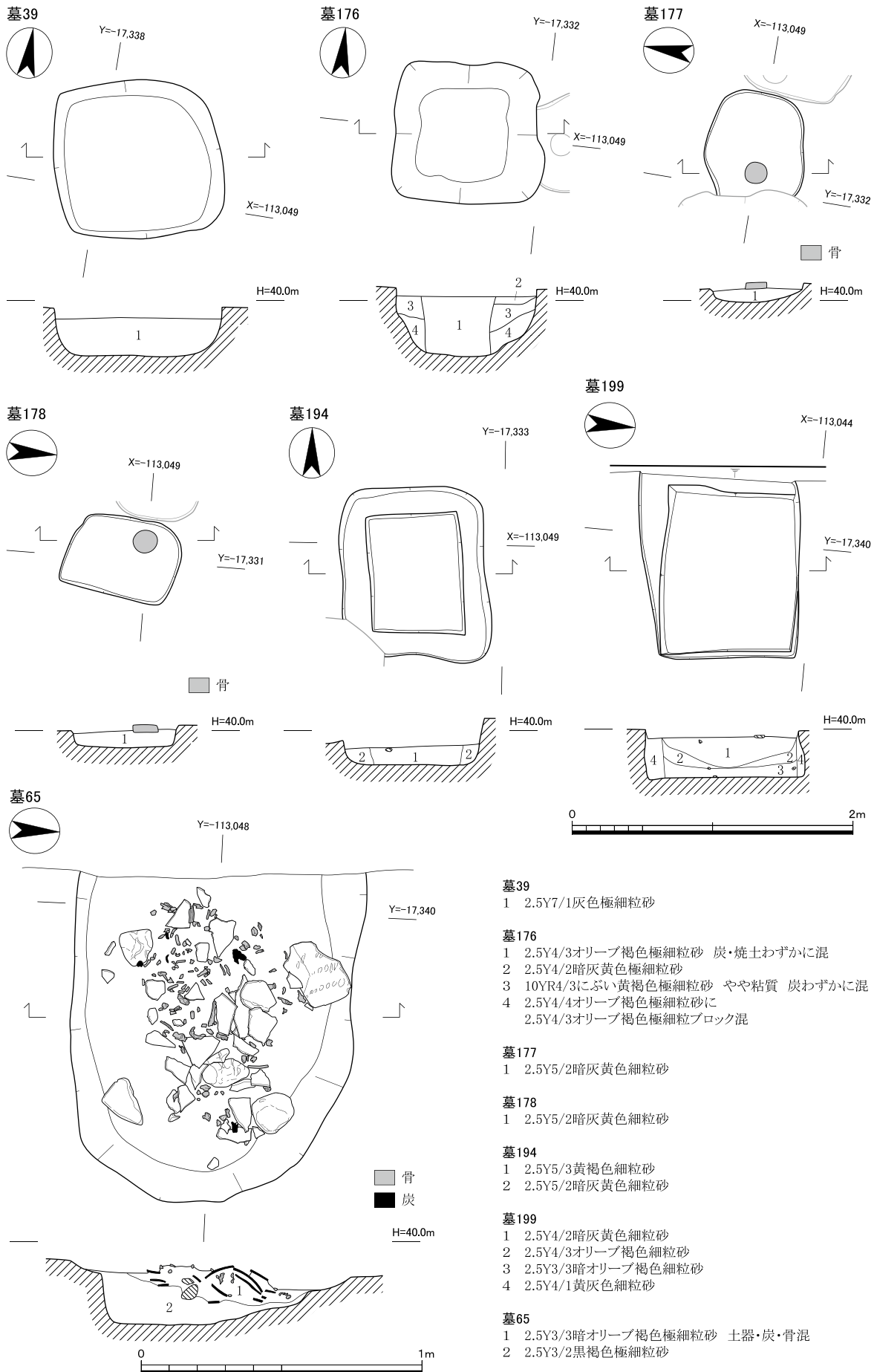


調査区北壁・東壁断面図 (1 : 80)

調査区北壁・東壁断面図(層名)

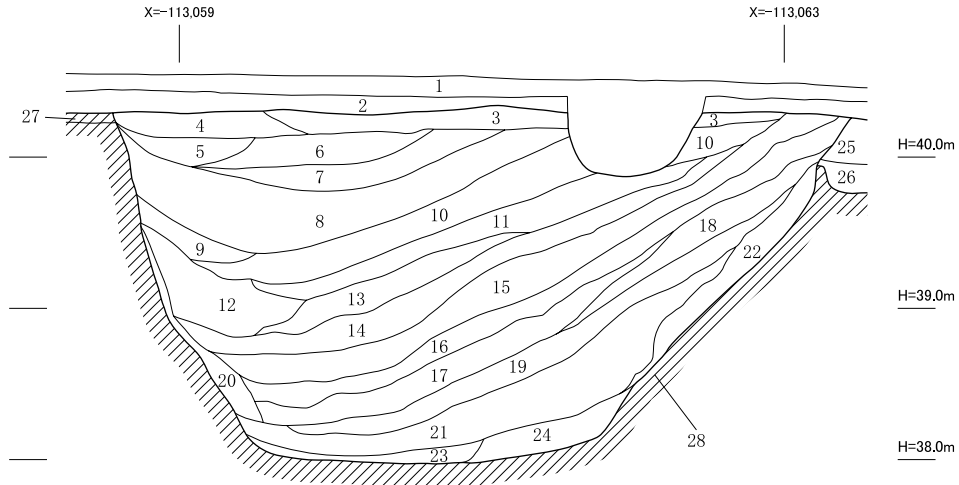


図版4
遺構



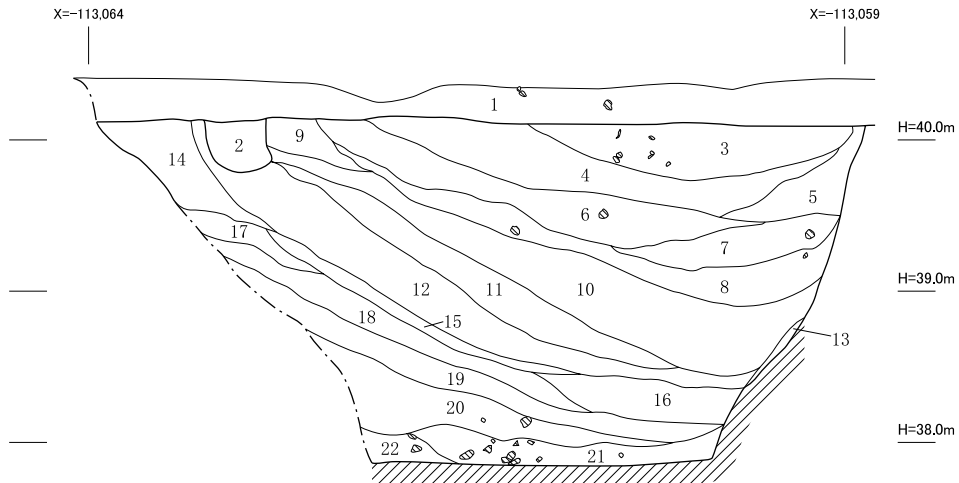
墓39・65・176・177・178・194・199実測図（1：40、墓65のみ1：20）

東壁



- | | |
|--|---|
| 1 10YR3/1黒褐色粗砂(現代盛土) | 15 10YR4/6褐色細粒砂 φ5cmまでの礫を極多量混 |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂に2.5Y4/1黄灰色細粒砂ブロック混(江戸耕作土) | 16 10YR4/4褐色細粒砂 粘性強 |
| 3 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 | 17 10YR3/4暗褐色細粒砂 φ5cmまでの礫を少量混 |
| 4 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 | 18 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂 φ5cmまでの礫を少量混 |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 φ3cmまでの礫を極多量混 | 19 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 φ3cmまでの礫を少量混 |
| 6 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 φ5cmまでの礫を多量混 | 20 10YR3/3暗褐色細粒砂 φ1cmまでの礫を極多量混 |
| 7 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 φ5cmまでの礫を多量混 | 21 10YR4/4褐色細粒砂 φ10cmまでの礫を少量混 |
| 8 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 φ5cmまでの礫を多量混 | 22 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂 粘性強 |
| 9 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂に10YR3/3暗褐色シルトブロック混 | 23 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性強 |
| 10 10YR4/4褐色細粒砂 φ10cmまでの礫を極多量混 | 24 10YR4/2灰黄褐色細粒砂 φ5cmまでの礫を多量混 |
| 11 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 | 25 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 φ5cmまでの礫を極多量混 (溝347) |
| 12 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂に10YR3/3暗褐色シルトブロック混 | 26 10YR4/4褐色中粒砂 φ7cmまでの礫を多量混 (地山) |
| 13 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 φ3cmまでの礫を多量混 | 27 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 |
| 14 10YR4/4褐色細粒砂 粘性強 | 28 10YR3/2黒褐色粗粒砂 φ5cmまでの礫を極多量混 |

西壁

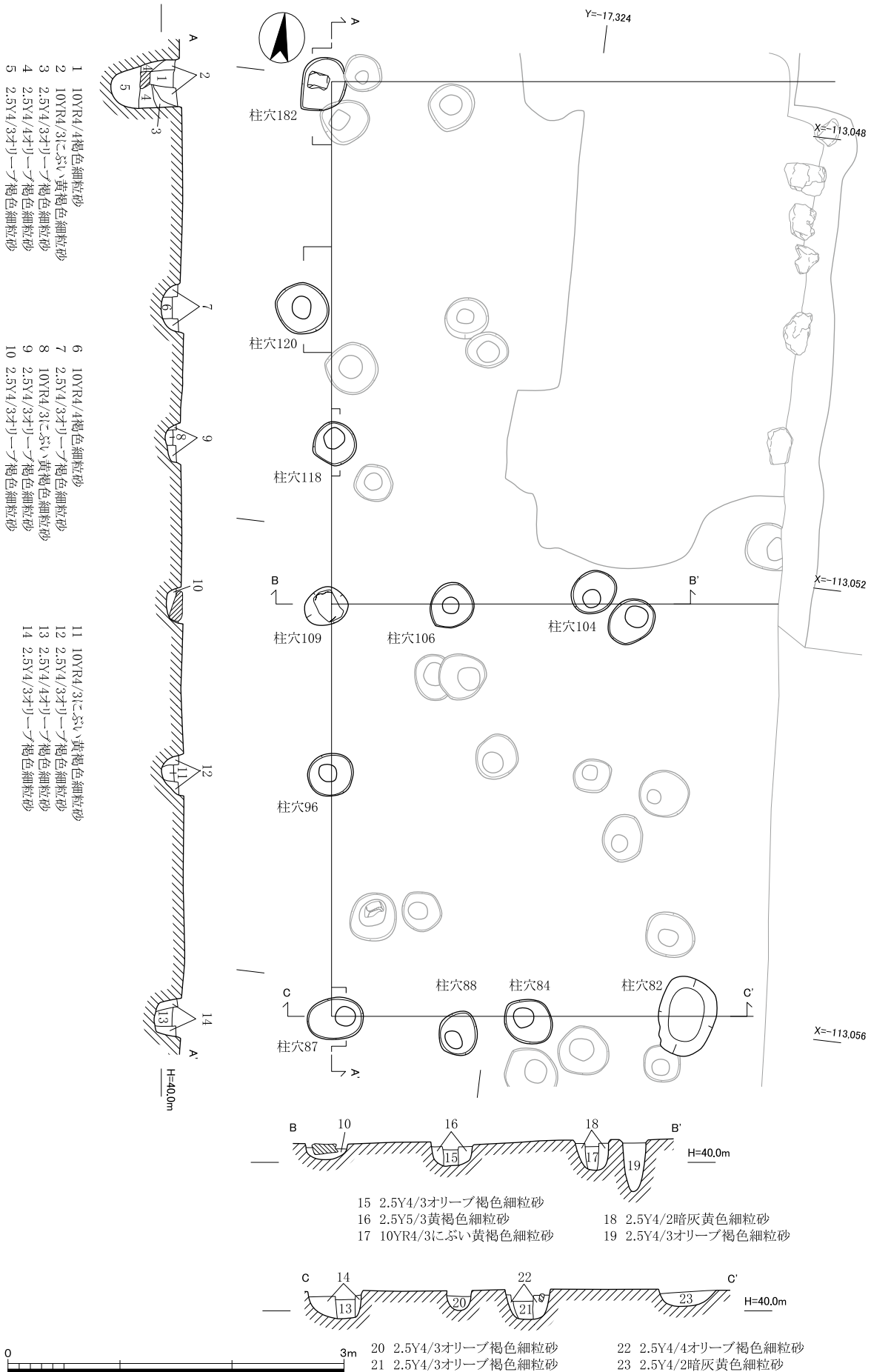


- | | |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 1 2.5Y3/1黒褐色粗粒砂(現代盛土) | 12 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂(柱穴4) | 13 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 |
| 3 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 φ3cmまでの礫を少量混 | 14 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 |
| 4 10YR4/4褐色細粒砂 φ3cmまでの礫を少量混 | 15 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂 | 16 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 |
| 6 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 | 17 2.5Y5/4黄褐色細粒砂 |
| 7 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 φ3cmまでの礫を少量混 | 18 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 |
| 8 2.5Y5/3黄褐色細粒砂 | 19 2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂 |
| 9 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂 | 20 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂 |
| 10 2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂 | 21 2.5Y4/2暗灰黄色シルト φ10cmまでの礫を少量混 |
| 11 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 | 22 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂 φ10cmまでの礫を極多量混 |

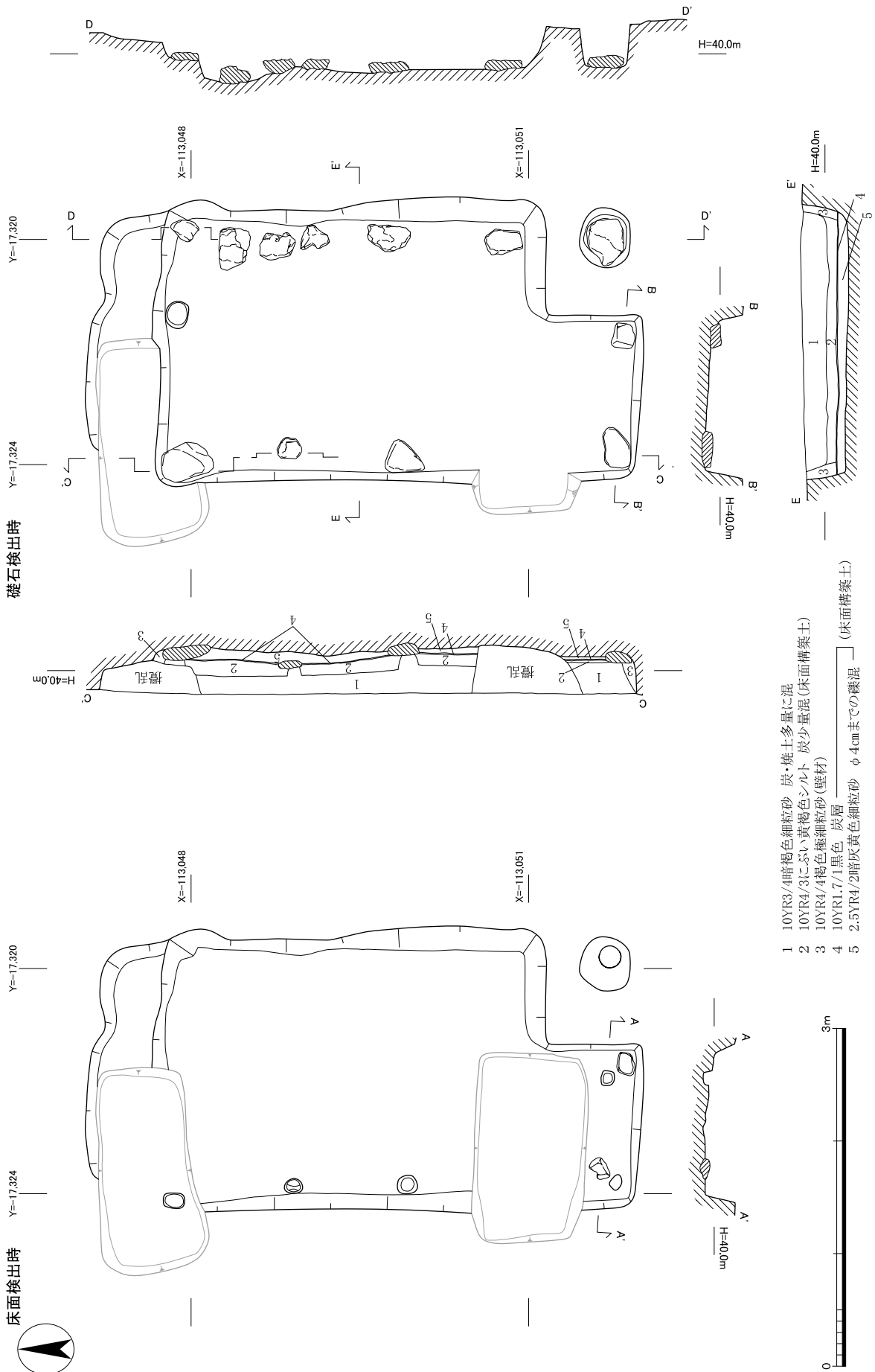


堀10断面図(1:50)

図版6 遺構

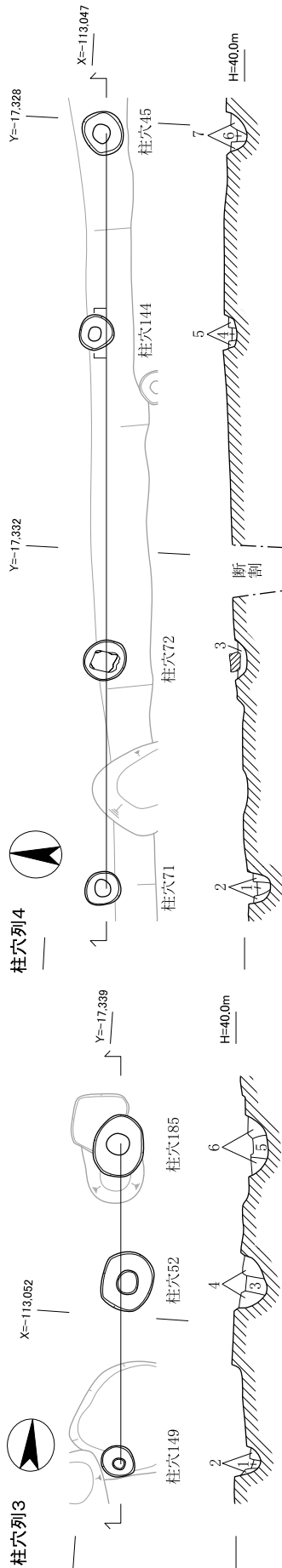


建物1実測図 (1 : 50)



- 1 10YR3/4暗褐色細粒砂 炭・焼土多量に混
- 2 10YR4/3こぶい黄褐色シルト 炭少量混 (床面構築土)
- 3 10YR4/4褐色極細粒砂 (壁材)
- 4 10YR1.7/1黒色 炭層
- 5 2.5YR4/2暗灰黄色細粒砂 φ4cmまでの礫混 (床面構築土)

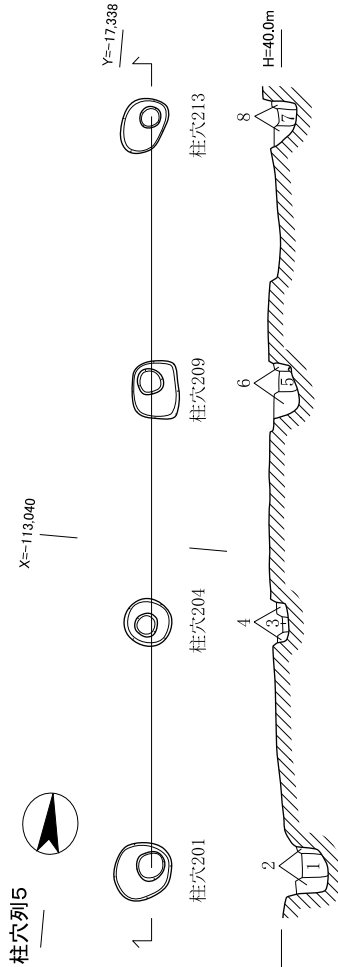
地下室126実測図 (1 : 50)



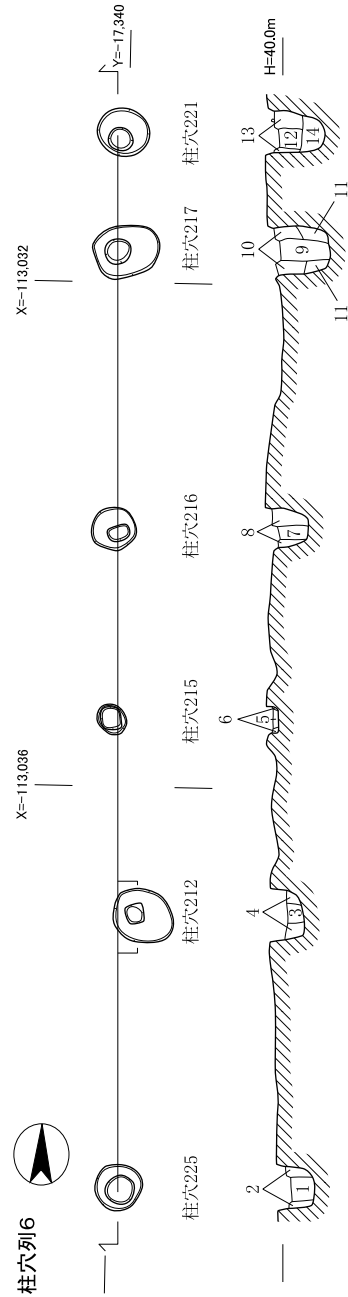
- 柱穴列3
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
 - 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂
 - 3 10YR4/4褐色極細粒砂
 - 4 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂
 - 5 10YR4/4褐色細粒砂
 - 6 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂

- 柱穴列4
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
 - 2 2.5Y5/3黄褐色細粒砂
 - 3 2.5Y5/4黄褐色細粒砂
 - 4 10YR5/6黄褐色極細粒砂

- 柱穴列5
- 5 10YR4/4褐色細粒砂
 - 6 10YR4/4褐色細粒砂 炭・焼土多量に混
 - 7 2.5Y5/4黄褐色細粒砂



- 柱穴列6
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色極細粒砂
 - 2 2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂
 - 3 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂
 - 4 2.5Y4/1オリーブ褐色極細粒砂
 - 5 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
 - 6 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
 - 7 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
 - 8 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
- φ～5cmまでの礫わずかに混



- 柱穴列7
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
 - 2 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
 - 3 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
 - 4 10YR4/4褐色細粒砂
 - 5 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
 - 6 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
 - 7 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
 - 8 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
 - 9 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
 - 10 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂
 - 11 10YR4/4褐色細粒砂
 - 12 2.5Y5/3黄褐色細粒砂に10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂
 - 13 2.5Y5/4黄褐色細粒砂
 - 14 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂

柱穴列3～6実測図 (1:60)



1 2区全景 堀10掘削前（北から）



2 2区全景 堀10掘削後（西から）



1 1区全景（南西から）



2 1区全景（西から）



1 堀70 (西から)



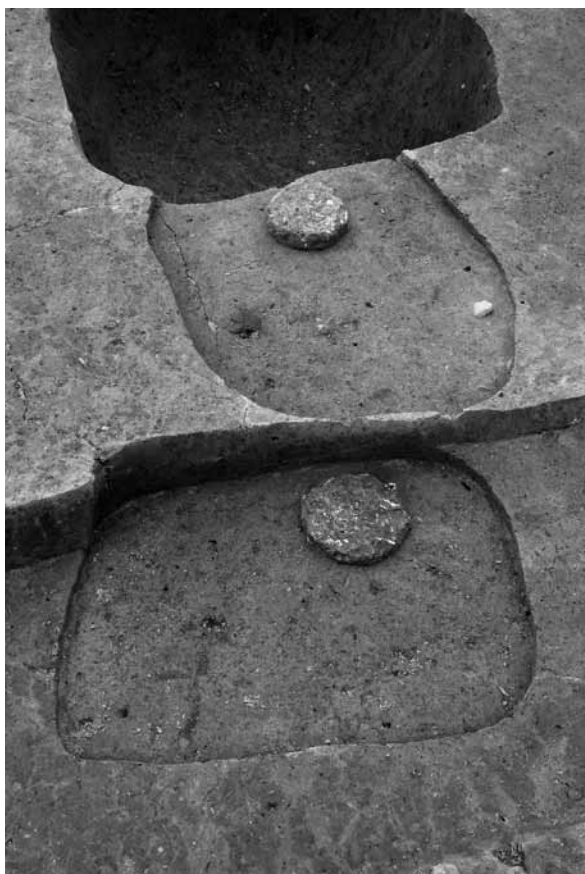
2 堀70東壁 (西から)



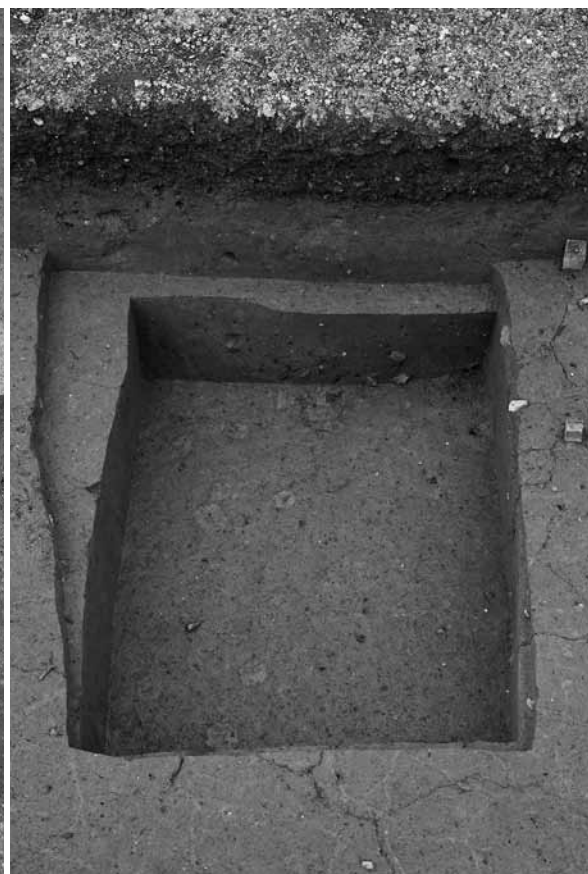
3 堀70西壁 (東から)



1 墓65 (北東から)



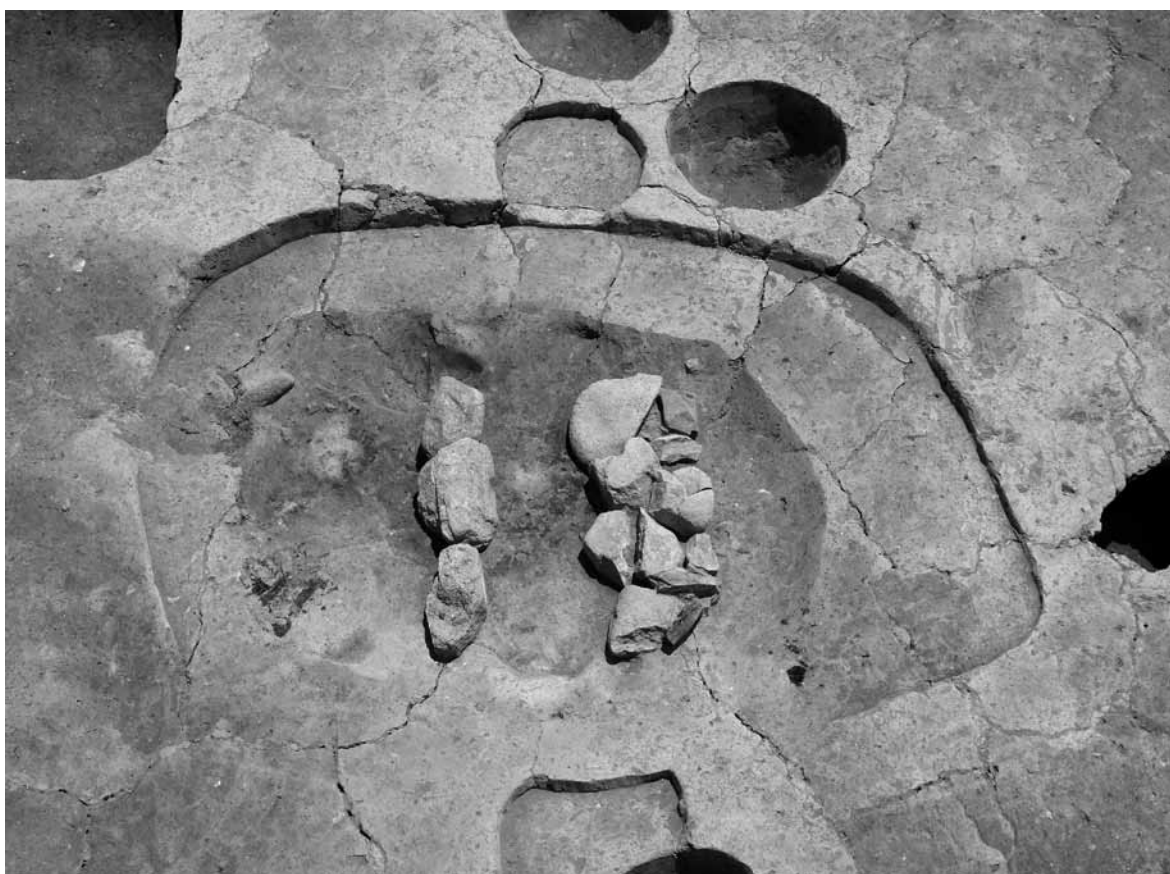
2 墓177・178 (東から)



3 墓199 (東から)



1 炉状遺構57 (東から)



2 炉状遺構57 (西から)



1 建物1 (北から)



2 地下室126床面検出時 (北から)



3 地下室126礎石検出状況 (北から)



4 地下室126床面除去後 (北から)



1 柱穴列1 (東から)



2 柱穴列1 柱穴76・77 (東から)



3 柱穴列2 (東から)



4 柱穴列5・6 (北から)



1 堀10 (南西から)



2 堀10 (西から)



3 土取り穴群 (西から)



1 土坑172 (東から)



2 池状遺構260遺物出土状況 (南西から)



3 池状遺構260 (北西から)



報 告 書 抄 録

ふりがな	やましなほんがんにあと							
書名	山科本願寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2021-6							
編著者名	鈴木康高							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2022年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やましなほんがんにあと 山科本願寺跡	きょうとしやましなく 京都市山科区 にしのかいかいちょう 西野山階町 11番地の2	26100	626	34度 58分 50秒	135度 48分 36秒	2021年5月 10日～2021 年7月20日	628.1㎡	工場建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山科本願寺跡	寺院跡	平安時代	柱穴、土坑	土師器、輸入陶磁器、 金属製品（銅鏡）		平安時代に製作された銅鏡が出土した。 山科本願寺成立以前の土地利用の様相が明らかになった。 山科本願寺内の空間利用の変遷が明らかになった。		
		平安時代～ 室町時代前期	堀、墓、炉状遺構	焼締陶器、金属製品				
		室町時代後期	建物、地下室、柱 穴列、土坑、土取 り穴群、堀	土師器、灰釉系陶器、 瓦器、施釉陶器、焼締 陶器、輸入陶磁器、 瓦類、金属製品、石製 品、人骨				
		江戸時代	池状遺構	染付磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-6

山科本願寺跡

発行日 2022年1月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961